始

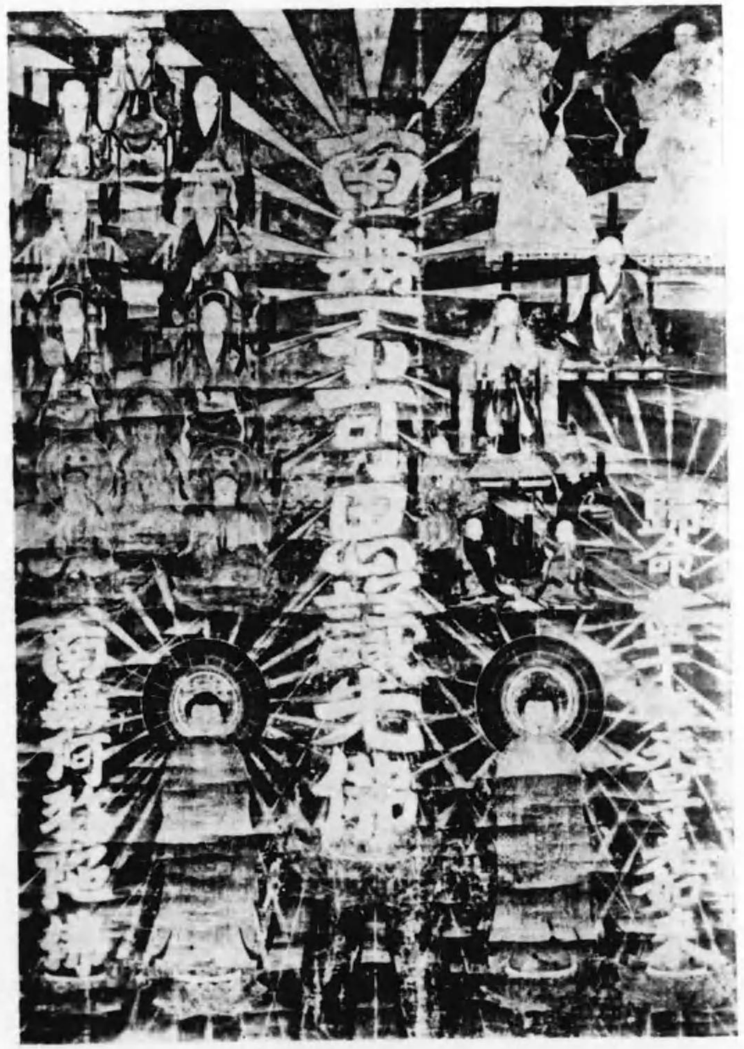
特232
922

納本

眞宗教義概說

上卷

宗祖眞蹟（專修寺藏）



光明本尊（本願寺藏）

凡例

一、本書は大谷大學豫科第二學年第三學年に於いて課する佛典基礎學の教科書として編纂したものであつて、上下二卷より成る。

一、上卷に於いては、三經並に七祖教義の概要を示し下卷に於いては、宗祖以後列祖に亘る教義の大要を略叙し、以て眞宗教義の大體を知らしめんとしたものである。

一、本書は、第一學年に於いて用ゐる「眞宗教史概説」と併せ讀むことに依て、一往眞宗學一般に關する知識と脈絡を知らしめむことを期した。

一、本書の叙述は極めて簡單であるが、それは直接教授の場合に、自然に補はれるであらうことを豫想したからである。

一、本書の立案は大谷大學佛典基礎學教科書編纂委員の合議になり、上卷は主として教授稲葉秀賢、下卷は主として教授一乘章二これが執筆の任に當つたも

のである。

昭和十四年三月

編　者　識

目　次

第一編　三經の要旨……一

大無量壽經要義

第一章　釋尊出現の意義……一

第二章　如來の本願とその成就……八

第一節　法藏菩薩の發願……八

第二節　攝法身の願とその成就……一一

第三節　攝淨土の願とその成就……一七

第四節　攝衆生の願とその成就……二一

第五節　本願の見方……三〇

第三章　釋尊の悲化……三四

第一節　抑止と攝取……三四

第二節　現實の批判……三八
第四章　信心の智慧……四三
第五章　不滅の法燈……四七

觀無量壽經要義

第一章　王舍城の悲劇……五一
第二章　要門の開說……五七
第三章　弘願の顯彰……六一
第四章　廢立と隱顯……六五

阿彌陀經要義

第一章　無問自說の經……七一
第二章　淨土の莊嚴……七四
第三章　念佛往生とその明證……七九

第四章　准知隱顯……八二

第二編　七祖の要旨

第一章　龍樹菩薩……八七
第一節　難易二道の教判……八七
第二節　現生不退と稱名報恩……八九
第二章　天親菩薩……九四
第一節　一心の宣布……九四
第二節　五念門の施設……九七
第三節　五功德門と菩提……一〇二
第三章　曇鸞大師……一〇七
第一節　自力他力の分別……一〇七
第二節　他力教の對機……一一〇
第三節　他利々他の深義……一一三
第四章　道綽禪師……一二五

第一節　時機の反省……一二五
第二節　難易二道と聖淨二門……一二八
第五章　善導大師……一三四
第一節　凡人の宗教……一三四
第二節　眞報土の開顯……一三七
第三節　往生行の批判……一四〇
第四節　淨土教に對する批難とその解答……一四四
第五節　三心釋の要義……一四八
第六章　源信和尚……一五八
第一節　厭欣の思想……一五八
第二節　報土と化土……一六一
第七章　源空聖人……一六五
第一節　選擇本願……一六五
第二節　廢助傍の三義……一七〇
第三節　必具三心の意義……一七三

第一編　三經の要旨

大無量壽經要義

第一章　釋尊出現の意義

眞實之敎

宗祖親鸞聖人に依つて「眞實之敎」と示された經典は、『大無量壽經』である。何故に『大無量壽經』のみが「眞實之敎」たるのであらうか。

もと、敎とは釋尊の成道から入滅に到る五十年間に說き示されたものを意味する。そして、この敎が言葉として經典の形態をとつたものは甚だ多い。けれども、この數多い經典はその表現が如何に異つてゐても、結局は釋尊の自覺內容に於ける波瀾に歸せらるべきものである。されば、何れの經典も釋尊の自覺內容を示すものとして尊重せらるべきは勿論であるが、而もそれが最も純一に表現せられた經典こそ「眞實之敎」を顯はすものとして

選ばれるのである。

釋尊の正風と正意

凡そ經典を大別するに、釋尊の正風卽ち外的釋尊を畫いたものと、釋尊の正意卽ち內的釋尊をあらはすものとがある。一般的に小乘經典と呼ばれるものは前者に屬し、大乘經典はまさに後者に屬する。從つて、小乘經典に屬する『阿含經』等に依れば、釋尊の風格は鮮明に畫かれ、正法に住し給ふ佛陀を想見することは出來るけれども、かくの如き佛陀をあらしめる正法そのものは、難知難見として明かに知ることが出來ず、從つて、佛陀正覺の內容そのものを說明する點に於いては、未だ行き屆いてゐないのである。然るに、大乘經典に屬する『華嚴經』『法華經』等は、かくの如き釋尊の表面にあらはれる風格よりも、却つてその自內證を如何に示すかに重點がおかれ、從つて、我々は此等の經典を通じて、直接釋尊の自覺內容に觸れることが出來る。而して、此等の大乘經典中、まさしく釋尊の自覺內容が眞實にあらはされたものとして、『大無量壽經』こそはその白眉をなすものである。しかも、『大無量壽經』が眞實の敎を顯はせる最高最深の大乘經典であることは、『大無量壽經』そのものがこれを最も明かに物語つてゐる。

大釋開說の特異相

何となれば、釋尊が王舍城の靈鷲山にましまして、大比丘衆及び深位の菩薩を前に、今や此の經を說かれんとするに當つては、未だ曾つて見ざる微妙の御姿を現ぜられた。こゝに常隨の弟子阿難は大いに驚き、愼んでかくの如き聖容を示された所以を問ひ奉つた。こゝに、釋尊は此の經が、まさに自己正覺の窮極を明かにせるものなることを說き給うたからである。然らば、その異常の相好とは如何なるものであつたかといふに、古來「五德現瑞」といはれるのがこれである。

五德現瑞

五德現瑞
- (一) 住奇特法——身德——(能依)相
- (二) 住佛所住——心德——(所依)體
- (三) 住導師行——利他德
- (四) 住最勝道——自利德
- (五) 行如來德——自利々他圓滿德
- 末
- 用
- 本

然るに、是等の五德は何からあらはれるかと云へば、それは勿論釋尊の自

覺內容を離れてあり得るものではない。しかも、五德は一應體・相・用に分れてゐるけれども、相と用とは體からあらはれるものであるから、佛の所住卽ち佛々相念の如來の正覺こそ、かくの如き微妙の相好を示し給ふ根源でなくてはならぬ。卽ち、釋尊がこの經を說かれるに就いて、今や自ら最深の正覺に住し給ふことを示されたのである。こゝに、佛々相念とは釋尊が本師本佛たる阿彌陀佛を念じ給ふ禪定のことで、『大經』の異譯『如來會』に大寂定と名けられるものである。されば、釋尊がこの經を說くに當つて、まさにかくの如き瑞相を示させられたことは、實に『大經』が眞實之敎をあらはせるを自ら示すものであつて、こゝに阿難の問を動機として、如來正覺の內容を開顯されることになつた。卽ち、釋尊はその聖容に於いて、自らの人格を沒して彌陀を示現したのである。

出世本懷の文

これ、法は常に人格を通して生命化せられ、具體化せられるものであつて、彌陀の法はこゝに釋尊なる人格を通して生命化せられ、それが釋尊の自覺內容として示されて來たのである。されば、釋尊の自覺內容は、釋尊が自らの上に體得し具現せられた、彌陀法の外に求めらるべきではない。こゝに、釋尊が自らの自覺內容を端的に說き示されることは、卽ち彌陀の敎法を說き給ふに外ならないことゝなる。故に、經には「如來以無蓋大悲矜哀三界所以出興於世光闡道敎欲拯群萌惠以眞實之利」と、その眞意を示させられたのである。されば、『大經』こそは「其智難量」しかも「定慧究暢無極、於一切法而得自在」たまへる如來眞實の敎法を開顯せるものとなるのである。そして、その敎法こそが、正宗分に到つて說き示された他力念佛の正法に外ならない。かくて、此の文を古來出世本懷の文と名づけ、こゝに釋尊出現の意義を認めるのである。それ故に、釋尊が此土に出現せられた窮極の目的は、たゞ眞實之利たる念佛の法を說かんが爲であつて、こゝに『大經』が眞實之敎たる所以がある。宗祖聖人が『敎行信證』「敎卷」の冒頭に「大無量壽經眞實之敎淨土眞宗」と宣ひ『大經』所說の念佛の敎法こそ眞實之敎であり、それが淨土眞宗に外ならぬことをあらはされたのも、この意味でなければならない。

眞實之利

大經と法華經

然るに『大經』に對して出世本懷の眞實敎をあらはすものとして『法華

經』があり、更に諸宗各々その所依の經典を以つて眞實敎をあらはすものと主張する。然らば、出世本懷の經が二箇以上もあることゝなり、それが單なる宗我的主張に過ぎぬと見えるかも知れない。けれども、『法華經』は成程大乘經典中にあつて、その至極の妙境をあらはしてはゐるが、その敎法の內容は徒らに高遠であつて、「深智の爲に說」かれたものに過ぎず、「淺識」のものは却つてこれに迷はざるを得ない。然るに、『大經』の念佛の法こそは、凡聖善惡如何なる人も信じ得る易行の法であつて、これこそ全人の救はるべき敎法に外ならない。されば、如來の大悲が全人の上に働くものである限り、聖者のみの敎たる『法華經』よりは、『大經』こそ眞實の敎であり、出世本懷の經でなければならない。

【註】古來、經典の組織を序分、正宗分、流通分の三段に分科することは、晋の道安以來、一般講經上に於ける通規として用ひられる所である。序分とは、その經が說かれるに到つた由來動機を示したもので、これに證信序と發起序とがある。證信序は所說の敎法の信ずべきことを證するもので、何れの經典にも通ずるから、これをまた通序と云ひ、發起序は特定の經典について、それが說かれるに到つた由來を明かにせるもので、各經典に依つて異るものであるから、これを別序とも云ふ。次に、正宗分は一經の正旨宗要をあらはせる部分で、これを正說分とも名づける。更に、流通分は正宗分に說ける敎法を永く流通傳持する樣特定の佛弟子に依囑する部分である。今、『大經』をこの三分の形式に依つて見ると、大體左の如く科を分つことが出來る。

一、序分
- 我聞如是……願樂欲聞
- 如來淨土の因果
  - 如來淨土の因
    - 發願——佛告阿難乃往過去……深樂寂滅
    - 修行——阿難時彼比丘……而得自在
  - 如來淨土の果
    - 略說——阿難白佛……故問斯義
    - 廣說——佛告阿難無量壽佛……於佛正道

（以上上卷）

二、正宗分
- 衆生往生の因果
  - 衆生往生の因
    - 念佛往生——佛告阿難其有衆生……誹謗正法
    - 諸行往生——佛告阿難十方世界……中輩者也
    - 諸佛讚勸——佛告阿難無量壽佛威神……廣度生死流
  - 衆生往生の果——佛告阿難彼國菩薩……不能窮盡
- 大悲攝化
  - 總說——佛告彌勒菩薩……壽樂無有極
  - 三毒の誡——然世人薄俗……不敢有疑

一五惡の誡――佛告彌勒汝等……不敢違失
一諸佛の勸信誡疑――現土證誡――佛告阿難汝起……略說之耳
三、流通分――佛語彌勒以下
（以上下卷）

第二章　如來の本願とその成就

第一節　法藏菩薩の發願

五十三佛

かくて、釋尊は佛々相念の世界に於いて、『大無量壽經』を說き給ふことゝなつた。卽ち、久遠の過去に錠光如來が此の世に出でられ、無量の衆生を敎化度脫し、遂に涅槃の雲にかくれ給うた。次いで、光遠、月光等の五十二佛が出世せられ、五十三番目に世自在王佛が世に出でられた。その時、一人の國王があつて、世自在王佛の法を聞いて大いに喜び、我もまた佛とならんとする志を起し、王位を捨てゝ比丘となり、法藏と名のらせられた。これが彌陀の因位の姿である。

法藏菩薩

嘆佛偈

こゝに、法藏菩薩は世自在王佛のみ許に參じて、その德を讃へると共に、自らの志願をも述べられた。それは普通に「嘆佛偈」と云はれる一段であつて、まづ、最初に世自在王佛の威德を讃嘆し、それに依つて自らも聖法の王たる願の滿足すべきことを請はれた。されば、「嘆佛偈」の意趣は、世自在王佛の威德が法藏菩薩をして、自らその佛に齊しくならんとの願を起さしめ、しかも世自在王佛の威德が、この志願を滿足する力となつたことを示すものである。それ故に、法藏菩薩をして發願せしめたものは世自在王佛であり、世自在王佛に於いて、法藏菩薩は自らの志願を決定したのである。されば、「嘆佛偈」にあつて、その志願を述べるにも、始めには上求菩提下化衆生の菩薩一般の願をあらはし、しかも、その願の內容として、佛身の光明と國土の最勝と攝化衆生の姿とが重ねて說かれてゐる。實に、かくの如き法藏菩薩の志願は、全く世自在王佛に依つてのみ滿足せしめられるのであつて、そこに「嘆佛偈」と云はれる所以が存する。

法藏菩薩の發願

かくて、法藏菩薩は「願佛爲我廣宣經法」と願ひ、その經法を聞くことに依つて、佛國莊嚴の理想內容を明かにせんとせられた。然るに、世自在王佛は願の內容を明かにするには、却つて汝自ら知るべきであると、一應その願を却けられた。こゝに、法藏菩薩は「斯義弘深非我境界」とて、重ねて世自在王佛の經法を請ひ給うた。かくて、世自在王佛は法藏菩薩の堅固なる志願を讃め給ひ、二百一十億の諸佛淨土の優劣を說き、またそれらの中に住む人天の善惡を示し、更にあり〳〵とその淨土の莊嚴を觀せしめ給うた。このことは、實に法藏菩薩の志願の內容が、單なる個人的理想に過ぎぬものではなく、廣く諸佛如來の淨土を知見して、そこに劣を捨てゝ勝を採り、惡を捨てゝ善を採る、最勝の佛國莊嚴なることを示すのである。從つて、世自在王佛の經法に依つて法藏菩薩の理想內容が明かにせられたことは、法藏菩薩の志願たる淨土建立を最勝希有のものたらしめたことを意味する。

五劫の思惟

かくして、法藏菩薩は「超發無上殊勝之願」し「其心寂靜志無所著」く、「思惟攝取莊嚴佛國淸淨行」せられた。實に、五劫といふ思惟攝取が、志著することなき淸淨の願心に基づき、淸淨眞實の淨土を建立せんとせられるにあつたことは、何といふ尊いことであらうか。

四十八願

この五劫の思惟に依つて決定せられたものが、次に說かれる四十八願であつて、法藏菩薩は世自在王佛の前に「發起悅可一切大衆」せしむべく、その證誠に依つて四十八願を述べられることになつたのである。

第二節　攝法身の願こその成就

大經の中心

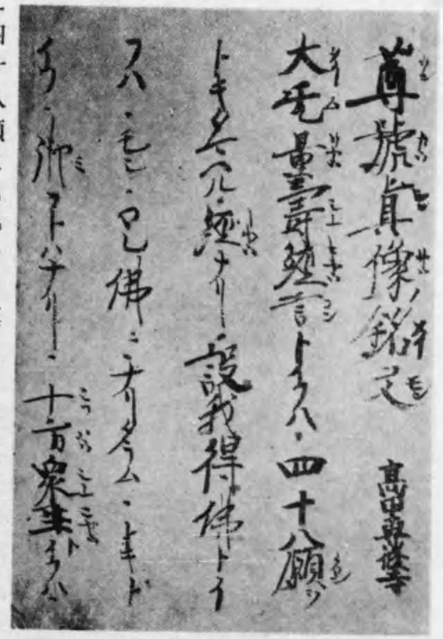
宗祖聖人が『尊號眞像銘文』本(初稿)に「大無量壽經言といふは四十八願をときたまへる經なり」と宣へる如く、實に『大經』は四十八願を中心として展開したものである。それ故に、四十八願こそは彌陀の願心を如實に表現したものとして、『大經』の中心をなすのである。

四十八願の分類

四十八願はこれを大體の順序から云へば、初の十六願は拔苦與樂の意を述べ、次の十六願は攝諸衆生の意を述べ、次の十六願は種々利益を述べ給うたものである。而して、これをその內容から分類すると次の如くである。

攝法身の願

攝法身之願　第十二第十三第十七の三願
攝淨土之願　第三十一第三十二の二願
攝衆生之願　餘の四十三願



尊號眞像銘文（宗祖眞蹟）

攝法身の願とは、法藏菩薩自ら自己を完成したいとの願であつて、衆生の救濟を果す爲にはまづ自ら至上の正覺を得ねばならない。されば、「嘆佛偈」に於いて「吾誓得佛」と願はせられ、こゝに四十八願にあつても、特に自己完成の本願を起させられた。まことに、溺れるものを救はんが爲には、身自ら水練に達せねばならぬ如く、生死の苦海に沈淪する衆生を救ふ爲には、能く衆生をして涅槃の極證を得しむるだけの德を具足せねばならない。

光壽二無量の願

かくて、法藏菩薩は攝法身の願として、第十二願に光明無量ならむことを誓ひ、第十三願に壽命無量ならむと願はせられた。卽ち壽命無量なることに於いて未來永遠の衆生を救濟し、光明無量なることに依つて普く一切世界の衆生に救濟の手をさしのべんが爲である。勿論、法藏菩薩の願はせられた無上正覺の內容は、德として具はらざるなき絕對的境地であつて、それは單に光壽二無量にのみ限らるべきではない。併しながら、光明は智慧の相であつて佛果菩提をあらはし、壽命は慈悲の相であつて涅槃の果德を示すのであるから、この二德は自利々他、拔苦與樂の正覺正容を攝盡した一具のものである。こゝに光壽二無量を以つて法藏菩薩が自らの無上正覺の內容を決定し、この二願を攝法身の願とせられた理由がある。

法藏菩薩の願心

されど、かくの如き光明無量、壽命無量の佛とならんと誓はせられた法藏菩薩の願心は、單に自らかくの如き佛とならんとする自利のみが窮極の目的ではない。慈悲を離れた智慧が意味なきが如く、利他を離れた自利は眞

實のものではない。實に、法藏菩薩は自らに成就した無量の光明を以つて衆生の煩惱の闇を照し、以つて衆生をして、自らと同じ光明無量の身たらしめんとせられるのである。更に、自ら壽命無量ならむことを願ひ給ふのみでなく、その無量の生命を衆生に廻施し、衆生をして永遠なる無量壽の生命を得しめんとせられるのである。それ故に、こゝに述べる所の攝法身の願意は、そのまゝ後に述べる所の攝衆生の願を生み出してくるのである。

攝法身〈光明無量―横―十方―拔苦
　　壽命無量―竪―三世―與樂〉

攝法身の願の成就

然らば、かくの如き法藏菩薩の願は果して成就したのであらうか。この疑問は、既に阿難に依つて釋尊に提出せられ、これに對して、釋尊は「法藏菩薩今已成佛現在西方」と答へ、更に「成佛已來凡歷十劫」とも云つてゐられる。卽ち、法藏菩薩は四十八願を起し給うて、その願を成就せんが爲に、實に「於不可思議兆載永劫積植菩薩無量德行」せられた。その身口意の三業に亘る修行は、要をとつてこれを云へば六波羅蜜の行であり、三業二利の行に攝められる。卽ち、經に依れば、三寶を恭敬し、師長に奉事し、或は一切粗惡の言語を遠離して自利々他の善業を成就し若しくは欲想瞋想害想を起さず、勇猛精進に清淨眞實の法を求められたのであつて、遂に「無央數劫積功累德……無量寶藏自然發應」するに到つたのである。

法藏菩薩の修行

無量壽佛

斯くて、法藏菩薩の本願は成就して、遂に阿彌陀佛卽ち無量壽佛とならせ給うた。阿彌陀といふのは梵語であつて、光明無量の故に阿彌陀(Amitābha 無量光)と名づけ、壽命無量の故に阿彌陀(Amitāyus 無量壽)と名づける。かくて、因位に願ひ給うた光明無量と壽命無量の願とはまどかに成就して、一切衆生の根本生命たる無量壽佛となり給うた。

無量壽佛の光明

されば、無量壽佛の光明は「最尊第一諸佛光明所不能及」であつて、その光明の體たる智慧は眞如の妙理を證り給へるのみでなく、凡夫も聖者も齊しく救濟し得る無上殊勝の智慧なのである。それ故に、釋尊も「說無量壽佛光明威神巍々殊妙晝夜一劫尙未能窮」と讃め給ひ、「佛智不思議智不可稱智大乘廣智無等無倫最上勝智」とも說かれてゐる。かくて、無量壽佛の智慧の現相た

五智

十二光佛

る光明は、普く十方の世界を照し、一切衆生をして其の闇を破り、一切の志願を滿足せしめ給ふのである。されば、無量壽佛をまた「無量光佛・無邊光佛・無礙光佛・無對光佛・燄王光佛・清淨光佛・歡喜光佛・智慧光佛・不斷光佛・難思光佛・無稱光佛・超日月光佛」「十二光佛」とも名づけたてまつる。この十二光佛に就いては、宗祖聖人は『淨土和讃』の初に、更にくはしくは『彌陀如來名號德』に口を極めて讃嘆してゐられる。

無量壽佛の壽命

また、無量壽佛の壽命は久しくして數へ上げることが出來ない。故に、釋尊はその壽命の無量なることを讃えて「禪思一心竭其智力於百千萬劫悉共推算計其壽命長遠之數不能窮盡知其限極」と說かれ、三世を貫いて未來永遠の衆生を救濟し給ふ所以は、畢竟この壽命無量の德を具へ給ふからである。

歸命盡十方無礙光如來
南無不可思議光佛

かくの如く、光明無量と壽命無量との二德を具し給へるのが無量壽佛であつて、この二德に依つてまた、歸命盡十方無礙光如來とも南無不可思議光佛とも申すのである。しかも、光壽二無量の德は、第十二第十三の二願に基づき、それが成就せられたものであるから、この二德を說ける文を各々その願成就の文と名づける。更に、阿彌陀佛はかくの如き大願大行を因として酬ひあらはれた佛であるから、佛の三身の中では報身佛に當ることは勿論である。

猶、第十七願に就いては、後に述べる如く、宗祖は之を攝衆生の願中に含めてゐられるので、今は言及しない。

第三節　攝淨土の願とその成就

佛身と佛土

國土があれば必ず國王があり、國王があれば必ず國土のある如く、佛があれば必ずその國土がなければならない。而も、我々の住む現實の國土は、我我自らの穢れた業に依つて出來たものであるから、善惡禍福の對立を免れず、如何に努力しても、我々自らの力では完全な福德を圓現することの出來

選擇淨土

ぬ國土である。されば、法藏菩薩が世自在王佛に依つて觀せしめられ給うた二百一十億の諸佛國土にあつても、或は罪惡不善にして人に責められる世界もあり、又佛の出世に遇ひ難くして遇ひ、その敎說を聞きながら、しかも

空しく苦惱に沈む世界もあつて、一切衆生を安樂ならしめることが出來ない。こゝに於いて、法藏菩薩は自らの清淨業を以つて清淨の國土を建立し、一切の衆生を救濟し、殊勝圓滿の妙境に導かんとせられた。これ卽ち、四十八願の中に攝淨土の願が誓はれねばならなかつた理由である。されば、攝淨土の願に於いて、自ら諸佛の淨土に超え勝れた絕妙の淨土を建立せんとせられた事は、たゞ菩薩自身の所住處の淨妙なるを願はせ給ふのみでなく、まさしく一切の衆生をその妙土に住せしめんといふ、利他の大悲心より發せることを知るべきである。この故に「嘆佛偈」にも「令我作佛國土第一其衆奇妙道場超絕」と自らの純粹なる志願を表白してゐられる。而して、かくの如き法藏菩薩の願心は、四十八願の第一に於いては地獄餓鬼畜生の三惡趣なからしめんと誓ひ給ひ、第三十一第三十二の二願に於いては、その國土明鏡の如く淨らかに、地上より虛空に到る一切萬物を萬づの寶と香とに依つて合成し、その麗かなること諸々の人天に超絕せしめんと願はせられた。

佛國土の成就

而して、法藏菩薩は何物にも執着せず、如何なる苦痛にも心を動かすことなき不可思議兆載永劫の修行に依つて、遂にこの攝淨土の願を成就せられた。かくて、成就せられた佛國土は七寶より成る大地廣やかに限りなく、寶は實と照し合ひ、色は色と相輝いて、その淸淨微妙なることは十方一切の世界に超え勝れてゐる。從つて、この佛國の大衆はその壽命彌陀と等しく、且つかくの如き聖者の數は百千萬劫の永い間、その智力を傾けて算へても算へ盡すことの出來ない程數限りなくまします。更に、此の國には七寶の寶樹が立ち並び淸らかな色に輝いて、淸風この樹を搖るがす時は、微妙の音樂を出すといふ寶樹の莊嚴、更には聞くものをして不退轉に住せしめる法音を出す道樹の靈德、或は十方世界の音聲中に最も勝れた微妙の音樂、或はもろ〳〵の寶を以つて嚴られた宮殿樓閣、若しくは淸淨香潔の味ひ甘露の如き水を湛へ、寒からず熱からず自然の妙聲を出す寶池、等の德相を具へ、その善美を盡せることは如何なる言葉を盡しても表現し得ない所である。

國土の妙

然るに、かくの如き佛國土の莊嚴は、それが實に法藏菩薩の無漏淸淨の業に依つて感得せられたものであることを意味する。實に、法藏菩薩は凡て

のものが實の體なく、實の相なく、またなしと觀るわが心もなしと知る空無相無願三昧に住して、身口意の三業一念須臾の間も清淨ならざるなく、眞實ならざることなき清淨の願行に依つて、この佛國土を成就せられた。從つて、彌陀の佛國土は法性の妙理に隨順し、大悲の本願力よりあらはれたもので、經にはかくの如き莊嚴を「此皆無量壽佛威神力故、本願力故、滿足願故、明了願故、堅固願故、究竟願故」と說かれてゐる。されば、釋尊はこれを讃嘆して「恢廓曠蕩不可限極悉相雜廁轉相入間光赫焜燿微妙奇麗」と說き、又「恢廓廣大超勝獨妙建立常然無衰無變」とも說かれてゐる。これ、宗祖聖人が彌陀の佛國を無量光明土と呼ばれた所以であつて、我々の相對的思惟を超えた絕對的境地なることをあらはしたものである。

攝淨土の願

從つて、この佛國に往生するものは、此等の莊嚴功德をそのまゝに受用し、佛の正道に安立することが出來る。かくて、攝淨土の願も攝衆生の願を離れたものでなく、また自ら攝法身の願に基いて顯現せるものである。故に、宗祖聖人が攝淨土の願をたゞに第三十一第三十二の二願ばかりでなく、寧ろ直ちに第十二第十三の二願を以つて、或は第十八の一願を以つてこれに配當せられた所以が知られやう。

第四節　攝衆生の願とその成就

攝衆生の意味

攝衆生の願とは、法藏菩薩がまさしく我々濁亂の衆生を救濟し、涅槃寂靜の境地に到らしめんとの願である。凡そ、佛敎の根本義は「諸惡莫作衆善奉行自淨其意是諸佛敎」であつて、誰人もその原因惡なれば必ず惡果を招き、その原因善なれば必ず善果を產むことは、佛敎の動かすべからざる基本原理である。然るに、我々の現實生活を省れば、煩惱具足いづれの行も及び難き身であつて、自淨其意は全く思ひもよらないのである。淸らかならんとすればする程、罪濁の自己に氣づかざるを得ない。こゝに、法藏菩薩は我々を無窮の濁亂より引き上げ、涅槃の福祉に到らしめんが爲に、濁亂の衆生を救濟し得るだけの原因(佛種)を成就し、その原因を衆生に施與して、以つて衆生の救濟を果遂せんと志願せられた。かくて、法藏菩薩は「嘆佛偈」に於いて「我

第十八願

當哀愍度脫一切十方來生心悅淸淨已到我國快樂安穩と願はせられ、進んで其の四十八願に於いては、涅槃の寂靜に到らしめる門を開き給うた。そして、まさしく濁亂の衆生を救濟せんとの誓を表されたのが、第十八念佛往生の願である。

しからば、その念佛往生を說ける第十八願は、如何に誓はれてゐるであらうか。本願の文に云く。

設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺唯除五逆誹謗正法。

こゝに「我」と云はれるものは、盡十方無礙の光を以つて、我々を救はむと願ひ給ふ法藏菩薩自らのことである。「十方衆生」とは濁惡の我々のことである。「至心に信樂して我國に生れむとおもひて乃至十念せむ」とは、眞實心を以つて、疑なく我國に生れむとおもふて、十聲にても一聲にても我が名を稱へよとの、ひたすらなる願心をあらはせるものである。「若し生れずば正覺を取らじ」とは、この三信十念の因が必ず往生淨土の佛果を結ぶべきことの、誤りなきを證し給ふ誓ひの言葉である。されば、第十八願念佛往生の旨趣は、如何なる衆生も阿彌陀佛の本願名號を聞信するのみで、必ず佛果菩提を獲るとの願心の表白に外ならない（願成就の文參照）。然らば、十聲にても、一聲にても稱ふべき名號とは如何なるものであらうか。

第十七願

この名號の成就を誓はせられたのが、實に第十七願であつて、願文は次の如くである。

設我得佛十方世界無量諸佛不悉咨嗟稱我名者不取正覺。

こゝに、法藏菩薩は衆生救濟の因として成就せる名號が、十方無量の諸佛に稱揚讃嘆せられる樣な不可思議の力用を持たないならば、我が本願は成就せぬと誓はせられた。實に、此の名號には法藏菩薩の不可思議兆載永劫に菩薩の行を行じ給うた時、一念一刹那も淸淨ならざることなく、眞實ならざることなくして、成じ給うた一切の善根功德、卽ち佛身を成じ給ふ所の大善根も、佛土を成じ給ふた大功德も、悉くこの名號の中に攝在して洩すことがない。誠に、宗祖の宣うた如く、それは「攝諸善法具諸德本極速圓滿眞如一

實功德寶海」なのである。されば、この無碍光如來の名を稱へること、一聲か若しくは十聲なれば、必ず佛果を證得せむと誓ひ給うた所に、如來の限りない願心の深遠なることを知ることが出來る。

十七、十八、二願の不離

しかも、十聲でも一聲でもとは、衆生往生の因として受け易く持ち易く之を成就し、それを我々に施與せんとする願心をあらはしたものであつて、第十七願に誓はせられたその名號を、そのまゝ信受する所に、第十八願の誓意がある。かくて、第十七願と第十八願とは、實に離るべからざる關係を持つのであつて、第十七願の名號成就の誓は第十八願の疑なき信受に依つて全うせられ、又第十八願の至心信樂欲生の三信は第十七願に基づくもので、名號は十方諸佛に稱揚讃嘆せられ、それに依つて十方世界の無量の衆生が、この大悲回向の名號を聞信することになるのである。

十九、二十、の二願

然るに、四十八願にあつて、衆生往生の生因を誓はれたのは、必ずしも第十八願のみに限らない。即ち第十九願には、自ら修する所の善根功德に依つて淨土に往生せんとするものゝ爲に、「發菩提心修諸功德」の因行を誓はせられ、又、第二十願に於いては、自己の善業の弱小なるに覺め、如來成就の因行たる名號の尊さを知りながらも、尚その名號をすら自己の善として進まんとする衆生の爲に、「聞我名號係念我國植諸德本」の因行を誓はせられてゐる。されば、本願成就の文にあつても、明かに念佛と諸行とが衆生往生の因として示されてゐる。實に、第十八願は有漏雜善の心行が最上の涅槃に進むには全く價値なきことを知らしめられ、たゞひとへに如來廻向の名號を信受して、如來に全托するものこそ眞實報土に往生すべきことをあらはし給うたものであり、如來本願の正意またこゝにあるべきにも拘らず、何故に第十八願の外に、十九二十の二願が誓はれたのであらうか。

方便の願意

思ふに、法藏菩薩が第十八願の念佛の法の外に、十九二十の二願を誓ひ、諸行諸善や自力の念佛を衆生往生の要法とせられたことには、深い願心の忝さがあるのであつて、そこに第十八願念佛往生が眞實であり、第十九願諸行往生や第二十願自力念佛の往生が方便であると云はれる意味を領解すべきである。即ち、十方衆生と呼ばれるものゝ中には、たゞ純一に如來成就の

名號に自己の救濟を全托する純他力の衆生の外に、自ら菩提心を發し、諸々の功德を修し、之を廻向して淨土を願生する者や、又、己の無能を知つて念佛に歸するものゝ、猶自力の機執に煩はされ、その念佛を廻向して淨土を願生する、所謂半自力半他力のものがある。されば、法藏菩薩の本願に於いて、その本旨とせられる所が、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界にあつて、そらごとたわごとまことあることない迷妄の闇にさまよへる衆生を目標として、かくの如き愚惡の衆生を何等の制約なしに救濟せんとせられるものであるにしても、かうした定散の自力に迷ひ、本願念佛の深旨に昏い衆生は、かくの如き如來のひたすらなる願心に覺めて、素純に名號の謂れを信受することが出來ないでもあらう。この故に、さうした機のために、或は「發菩提心修諸功德」の因を說き、或は「係念我國植諸德本」の因を說き、之を導いて本願眞實の念佛に導き入れむとし給うたのである。こゝに、第十八願の眞實に對して、十九二十の二願が方便の願と云はれる意味が存する。されば、十九二十の二願に於ける誓約は、如何なる衆生も「たゞ念佛して」救はれる純一の信念に、

如來本願の歸結

即ち第十八願の他力念佛に、十方一切の衆生を轉入せしめんが爲なのである。こゝに、我々は如何にもして一切の衆生を眞實に救はんとし給ふ、如來の願心を感得すべきである。

三誓の偈

斯くて、我々は攝法身の願も攝淨土の願も、それはたゞ攝衆生の爲であつて、その中心は如來眞實の結晶たる、名號の廻施ひとつにあることを知らねばならない。何故なら、佛身成就の善根も、佛國成就の功德も、それは凡て名號中に攝在せるものに外ならないからである。されば、四十八願はまた大悲廻向の願心ひとつに歸する。かくて、此の本願の要旨を法藏菩薩は四十八願の後に三誓の偈としてあらはし給うた。第一の誓には、全本願の必ず滿されむことを願ひ、第二の誓には第十八願の旨を主として第十七願の意を含め、此の本願が心の貧しきものを救はんが爲であることを示し、第三の誓には第十七願の旨を主として第十八願の意を兼ね、その御名を十方に聞えしめたいと誓はせられ、重ねて「爲衆開法藏廣施功德寶常於大衆中說法師子吼」と仰せられた。我々はこゝに如來の願心が大悲廻向の御業にこめら

れ、その願心はたゞ如來の全功德をこめさせられた眞實の御名を、我々に與へたいと望み給ふより外ないことを知らねばならない。

願成就の文

しかも、かくの如き法藏菩薩の本願は成就したのである。『大經』下卷の初に、釋尊は第十七第十八二願の成就を次の如く一連に說き給うた。

十方恒沙諸佛如來皆共讚嘆無量壽佛威神功德不可思議。

諸有衆生聞其名號信心歡喜乃至一念至心廻向願生彼國卽得往生住不退轉唯除五逆誹謗正法。

かくて、十方恒沙の諸佛如來の讚嘆に依つて其の佛の名號を聞く時、我等衆生は自ら廣大の願を起し無邊の行を修して、一切煩惱を斷ずることなくとも、既に佛の方より無上寶珠の名號を我等に廻向し給ふが故に、我等が佛果を證得することに少しも缺くる所はない。實に、聞くといふことは生命を領受することである。既に、如來はその淸淨業に依つて、光明と壽命とに限りない佛身を成就し給ひ、恢廓曠蕩の佛土を完成し給ひ、しかもそれをひとつの眞實功德たる名號にあらはされた。されば、如來の淸淨眞實が一面に高く遠く現はれては彼の佛身佛土となり、一面に低く近く顯はれては此の佛名とならせられた。實に、無限の佛德は一名號となつて我々に觸れ給ふのである。從つて、この佛名を聞く時、如來の全生命はそのまゝ我々の生命となる。釋尊が「諸有の衆生よ、唯斯の御名を聞け、一念之を受けて、爾は直ちに淨土往生の身に定められむ」と、無量壽佛の威神功德を讚嘆せられた成就文の意味は、たゞ如來の眞實が佛の位から衆生の位に來らせられる、一念を示されたものである。かくて、聞其名號の一念において佛の本願は眞に滿され、我々の迷の闇はこゝに終を告げる。實に、『大經』は四十八願を說き給へる經であり、その四十八願は第十八願、第十八願はその成就に極まるのであつて、こゝに十八願成就文の重要な意味が存する。

第十一往相證果の願

かくて、我々は聞信の一念に、煩惱を斷ぜざれども得涅槃分の正定聚の位に住し、臨終の夕に大般涅槃を超證するので、この證果をあらはされたものが第十一願とその成就の文とである。云く。

設我得佛、國中人天、不住定聚必至滅度者、不取正覺。

滅度とは涅槃の譯語であつて、あらゆる迷を滅して、悟の彼岸に至るの意味であり、佛敎の究極的理想とする大般涅槃の境地である。『大經』には、その果報に就いて種々の德を委しく說いてゐるが、なかにも注意すべきは一生補處の德であつて、一生補處とは、今一生の後に佛の位を補ふべき等覺の位をいふのである。顧みるに、第十一の願文が示す如く、淨土に往生する者は皆如來と同じ大般涅槃の境に入るのではあるけれども、しかし、往生人は決してそのまゝ涅槃に住するのではなく、自ら利他活動を發して一生補處の位に下り、衆生濟度の爲に生死の世界に還り給ふのであつて、宗祖はこゝに、還相廻向の德を味はれた。これを本願に配せば第二十二願に當る。

斯くの如く法藏菩薩の超世無上の本願は成就したのである。

法藏菩薩の本願

第五節　本願の見方

法藏菩薩の本願がその內容から分類して、攝法身の願・攝淨土の願・攝衆生の願となることは、既に述べた如くである。されば、四十八願の各々には、それ〴〵の願事が說かれてゐるけれども、結局は如來自ら自己を完うし、淨土を完うし、而して我々衆生を完うしたいの三願より外はない。

併しながら、かくの如き超世の願を起し給うた如來の願心に思ひをいたすならば、四十八願をたゞ平面的に分類して三分することは、必ずしもその當を得たものではない。むしろ、四十八願全體がそのまゝ如來願心の表現として、そこに如來の眞實を見るべきである。されば、善導大師は四十八願を更に立體的に見て、四十八願全體を或は攝法身の願となし、或は攝淨土の願となし、或は攝衆生の願とせられたのである。例へば『玄義分』[付八]に「法藏比丘發二四十八願一……今既成佛卽是酬因之身也」とあるは、四十八願全體を攝法身の願とせられた明證である。又『序分義』[舒]に「四十八願願々皆發二增上勝因一……感二成勝報一」とあるより見れば、四十八願は凡て淨土建立の願となり、從つて攝淨土の願となる。更に『散善義』[四右]に「四十八願攝二受衆生一」と云へる文に依れば、四十八願は凡て攝衆生の願ともなる。かくの如きは、善導大師の深い信念に發するものであつて、願々一として如來願心の眞實をあらは

善導大師の本願觀

さゝるはないことを感銘せられたのである。從つて、攝法身、攝淨土、攝衆生、の三の意味は本願の上に渾然と結びつき、何れの願を以つても限定せられ得るものではない。

法然聖人の本願觀

併し、攝法身も攝淨土も攝衆生を離れては意味がないのであつて、攝衆生の爲の攝法身であり攝淨土であらねばならぬ。こゝに、善導大師の深旨を受け嗣がれた法然聖人は、却つて攝衆生の願が如來願心の樞軸なることを感得し、その中心たる第十八願を四十八願の核心と見られた。『選擇集』本二十九左に「四十八願中以念佛往生之願而爲本願中之王也」と宣へるは卽ちこれであつて、餘の四十七願は却つて第十八願に歸せしめんとする欣慕の願に外ならぬ。更に云へば、第十八願は根本の願であり、餘の四十七願は枝末の願である。されば、淨土を欣慕せしめて、その淨土に往生する正因を誓はせられた第十八願に歸せしめることは、枝末は根本に歸するが如く、第十八の王本願に歸せしむることになる。故に、法然聖人は第十八願を選擇本願と名づけ、又念佛往生之願と名づけて、そこに如來願心の中心的意味を認められたのである。

宗祖の本願觀

この元祖の教旨を最も純一に傳承せられた宗祖聖人は、常に必ず第十八願を選擇本願と名づけて重視せられたのであるが、更に七祖の微意を顧みて、そこに精密な本願の見方を獨創せられた。卽ち、『教行信證』「眞佛土卷」の終には「就願海有眞有假」と仰せられ、第十八の眞實の願に對し、第十九第二十の兩願を假の願とせられたので、右の第十八願を以つて四十八願を該攝する見方を該攝門と稱するに對し、斯く四十八願に眞假の相を分つ見方を分相門と呼ぶのである。

眞實の願と方便の願

又、第十八願を注意すれば、設我得佛の我(眞佛)はすでに第十二第十三願にあらはれ、乃至十念(名號)は第十七願に、若不生者(證果)の生は第十一願にあらはれてゐるから、宗祖は第十八願を信心成就の願とし、一箇の第十八願を十七、十八、十一、十二、十三の五願に開き示されたのであつて、第十八願を以つて眞實の願を證明するを一願建立の法門と稱するに對し、斯く五願を以つて具にするを五願各立の法門と呼ぶのである。その他、『教行信證』の體裁に就いて二廻向四願、六法五願、眞實六願、眞假八願の法相

あることは既に注意した通りである。

第三章　釋尊の悲化

第一節　抑止と攝取

釋尊の勸信誠疑

かくの如く、阿難を對告衆として佛願の生起本末を說き終らせられた釋尊は、こゝに再び端を改めて彌勒菩薩を呼びかけ、懇篤に信を勸め惡を誡しめさせられた。まことに、法藏菩薩の願行に依つて成就した阿彌陀佛の國土は微妙淸淨であり、しかもその淨土に往生すべき易行の道は今や開かれた。されば、上下貴賤たゞ本願他力の大道に信順して、惡趣自然に閉ぢ、高い佛果に到る安養國の往生を願ふべきである。

易往而無人

然るに、彼の國土は往き易くして人無しと說かれてゐる。それは何故であらうか。思ふに、易往而無人なる語は『大經』一部の敎旨を展開せしめる中心であつて、易往は廣く前の本願の敎說に對し、而無人は後の悲化段に對

應せるものである。卽ち、本願他力の敎說に依れば、如何なる愚痴無智のものもたゞ如來廻向の名號を信受する一念に、煩惱具足のそのまゝ救はれることが出來る。愚かな儘に、我々は今佛智に浴びせられてゐる。その佛智に照されることに依つて、闇の生活を轉じつゝ、涅槃の彼岸にひたむきに進むことが出來る。かくて、我々の自ら進むべき易往の竪の道は明かになつた。然るに、我々は自ら獨り存在するのではなくて、橫に自己を圍む環境がある。誰人にも親があり妻があり子供があつて、廣く家庭・社會へのつながりがある。しかも、これ等橫のつながりは、ともすれば我々の迷妄を深める愛欲の本源となる。こゝに、釋尊は我々の竪に突き進むべき本願の白道を敎へられたと共に、更に橫の環境に對處すべき規範をも知らしめられた。

抑止の聖意

されば、『大經』下卷に懇ろに示された悲化段は、本願の大道が眞諦と云はれるに對し、俗諦に屬するのであつて、しかもその本源は第十八願とその成就に於ける「唯除五逆誹謗正法」なる抑止の語に發する。それ故に、我々はまづその抑止の聖意をこそ虔かに聞かねばならない。

抑止と攝取

抑止とは、第十八願及び其の成就文に於いて「唯除五逆誹謗正法」と說かれてゐるに就いての教意である。既に、願文にあつては十方衆生と呼びかけ、成就文に於いては諸有衆生と示して、凡聖善惡あらゆる衆生の攝取が誓はれてゐる。されば、五逆誹謗法の衆生と雖も、如來の攝取に洩れるべきはずはないのであつて、ましてや、『觀經』には明かに十惡五逆具諸不善の衆生の救濟が說かれてゐる。それにも拘らず「唯除五逆誹謗正法」と誡め給うたのは何故であらうか。

曇鸞の謗法攝不論

善導大師の解釋

これに對して、曇鸞大師は『大』『觀』二經の相違を問題とし、『大經』が五逆と謗法との罪を重ねてゐる故にこれを除くに對し、『觀經』は十惡五逆の罪のみを說くから往生を得ると說明し、更に謗法の罪は特に重く、現に正法を謗るものが淨土を願ふ筈はないから、これを除くのであると說いてゐる。この曇鸞大師の旨を受けられた善導大師は、謗法罪のみを除く所以は、實に未造現造の罪を抑止したのであつて、まさしく如來の願心から云へば、かくの如き逆謗の衆生をこそ如來本願の目あてとし給ふのであり、從つて已造のものと雖も、廻心すれば皆往生を得ることを明かにせられた。かくて、抑止と攝取の問題は逆謗の機を救ふ意味を示すと共に、さうした罪を犯さない樣にこれを誡められた釋尊の悲化のあらはれと戴かれるのである。

釋尊悲化の要點

かくて、釋尊がかくも嚴しく誡められた意趣を、次の三點に歸することが出來る樣に思ふ。卽ち、第一には我々の現實の姿を如實に自覺せしめんが爲である。我々が自己の姿を反省することなく、自己罪濁の姿を知ることがなかつたならば、如何にして本願の大悲を知ることが出來るであらうか。されば、我々の現實が逆謗の罪に滿された悲痛の現實なることを知らしめて、本願力の廻向を受くるより外に救の道なきを知らしめ給ふのである。第二には大悲本願の奧旨は、却つて逆謗の罪深きものをこそ救の的とせられることを示さんが爲である。實際に逆謗の衆生が本願の救濟から除かれるとしたならば、現在の我々は遂に出離得脫を期することは出來ないであらう。何故なら、我々濁世の衆生は、たとひ逆謗の罪を犯さずにゐても、何時かくの如き重罪を犯すやもはかり難い素質と傾向とを持つてゐるから

である。闇を闇と知らしめるものは光であつて、逆謗の罪の如何に深いかを知らしめるものは、實にこの逆謗の衆生を哀れみ給ふ如來の大悲でなければならない。こゝに抑止の深い意味がある。更に、第三には逆謗の罪を抑止することに依つて、正しく本願の廻向を我々に受けしめんが爲である。自ら語りつゝ對者の語を聽くことは出來ない。よく聽かんが爲には、自ら靜かであらねばならない。逆謗の罪に騷いでゐては、本願の名聲は聞くことを得ない。されば、抑止し給ふことは攝取せんが爲である。如何に逆謗の衆生と雖も、必ず攝取せんとする如來本願の大悲が、この抑止の底に深く深く流れてゐるのである。かくて、我々はこの抑止に依つて如何に如來の慈悲が深くましますかを知ると共に、又慈悲深きが故に、如何に我々の濁惡なる現實を悲痛し給ふかを知らしめられるのである。

第二節　現實の批判

悲化段の二面

こゝに、釋尊は往き易き本願の白道が開かれてゐるに拘らず、しかも往く人のなき所以は「世人薄俗にして共に不急の事を諍ふ」てゐるからであるとて、懇ろに悲化の一段を說いて、我々の現實生活を鋭く批判せられた。即ち、釋尊は業の原理、因緣果の敎理に基づいて、一面に毒惡な人間生活の慘めさ愚かさ哀れさを說いて我々を目醒めしめ、他面かくの如き愚惡の生活を離れむとして離れ得ない我々の爲に、懇ろに垂れ給ふ本願の大悲を受けて、父子兄弟夫婦親屬、常に相敬ひ相助け相和いで進むべきを誨へられた。されば、悲化段はこれを順觀すれば、鋭い現實生活の批判に基づいて我々の人生の如實相を示し、かくの如き愚惡の衆生も本願の白道を歩むことに於いてのみ、天下和順日月淸明の生活を實現し得ることを示されたことゝなり、これを逆觀すれば、既に本願の眞實を受けて佛の願力に乘ずれば、我々は今や淨土の新しい民でもあるから、自ら愼しみ得ぬ中から愼しむべき一切の行爲の基準が與へられたことになるのである。

三毒段

古來、この悲化の一段を三毒段と五惡段とに區分することは常のことである。而して、三毒段に於いては、富めるも貧しきも共に財物を憂ひ、有るも

五惡段

のは失はぬ樣に心を痛め、無いものは如何にしても得むと努め、たゞ欲心の爲に馳せつかはれて安き時のない貪欲の姿、また心の中には毒を含み怒を蓄へ、互に恨み怨まれて遂には大きな怨敵となり、或は怨むものと相會はねばならぬに反して、互に愛しみ合ふものと別れねばならぬ瞋恚の姿、更には善を作せば善を得、道を爲さば道を得る因果の理を知らぬ愚痴の姿が、實にまざ〳〵と描かれてゐる。かくて、釋尊は人間生活の三毒の姿を的示して後、されば世の人々は生老病死の苦を厭ひ、端身正行諸善をなして心垢を除き、言行忠信表裏相應して勤行精進せなければならない。まことに、苦難の世は須臾の間のことであつて、後には無量壽佛の國に生れて生死の根本を拔くことが出來る。この故に、佛を敬ひ慕ふものこそ、最大の善をなすものであるとこの一段を結んでゐられる。

次に、五惡段にあつては、まさに佛を敬ひ慕ふ衆生の一切の行爲の基準を開いて、仁義禮智信の五善をなすべきことを勸め、これに反する五惡を捨て去るべきことを說かせられた。因みに、五善には五戒に當てられる意味もあるが、今は經說の內容に照應して、廣く五常に當てると見るが妥當の樣である。まことに、世の人々を始め蠕動の類に到る迄、强者は弱者を虐げ互に殘害殺戮し、しかも犯したものは寸分も赦され得ないのであるから、現世にあつては王法の牢獄に繫がれ、未來世に於いては鬼畜の形を受け、六道を輪廻せねばならない。これを不仁の痛燒となし、その勤苦は大火の人身を燒くが如きものである。又、世の人々は父子兄弟夫婦互に義を知らず、臣は主を欺き、子は父を欺き、兄弟も夫婦も朋友も互に欺き合うてゐる。かくて、現世にあつては王法の牢獄、未來にあつては三塗無量の苦を受けねばならない。これ不義の痛燒である。又、人は互に相寄り相助けて天地の間に生きねばならぬに拘らず、互に邪心を抱いて自ら禮讓を傷けてゐる。されば、かかる人々は自然に罪せられて痛を受け、三塗の苦火に燒かれねばならない。これ不禮の痛燒である。又、世の人々は互に敎へて無智の惡事をなし、兩舌惡口妄語綺語を以つて他人を讒侮し、善人をそねみ賢者を亡ぼす。かゝるものは遂にあらゆる福德から見放され、罪報自然に身心ともに痛苦しなけ

ればならない。これ不智の痛燒である。更に、世の人々は恩にそむき義に違ひ、報償の心少しもなく、先聖諸佛の經法を信ぜず、道を行うて度世すべきことを信ぜず、作善得善爲惡得惡の理を信じない。かくの如き人々は惡道遂に絶ゆることなく、自然に三塗の苦難を受けて免れる時を知らない。これを不信の痛燒とする。

されば、何人も一心に心を制し、身を端し行を正し、諸善を作し衆惡を造らず、泥洹の道を獲なければならない。まことに、佛は是等の五惡に狂ふ衆生を哀愍し給ふのであるから、上のものは善をなして下を率ゐ、自ら清く佛を尊び善を行ひ、仁慈博愛の志あつて佛の教誨に背かぬ樣にせねばならない。まさに、此の世に於いて德本たる佛の名號を稱へ、布恩持戒忍辱精進一心智慧の六行をつとめ、又、他人にこれを敎へ、德を立て善を行ひ、心を正しく清淨潔白に保たねばならない。しかも、此等の事が我々に於いて作し得られる所でないと打ち捨てをいてはならない。此の憂と畏と惱との世に於いて、一日一夜これを勤める事は、淨土にて修すべき百年の善に超え、十日十夜之を修める事は、淨土にて積むべき千年の德にも勝つてゐると釋尊は勸められてゐる。行のなるとならぬとは我々の問ふ所ではない。我々は弱く力が少い。如何に勤めればとて誇るに足る程のことは出來ない。けれども、人に求める前に自ら努める所に、本願の眞實を受けて生くるものゝ道がある。大なる如來の法、明かなる本願の道、まことに「佛の遊履する處、國邑丘聚化を蒙らざることなし。天下和ぎ順ひ、日月清くして明らかに、風雨時を以つてし、災厲起らず國豐かに民安らかに、兵戈用ふることなく、德を崇び仁を興し、務めて禮讓を修む」るのである。これが正法の國であり、我々は共にこの正法の生活にこそいそしまねばならない。

第四章　信心の智慧

罪福信を誠しむ

かくの如く、釋尊は鋭く我々の人生々活を批判して、世の凡ての人々が阿彌陀佛の國土を欣ひ、端身正行、德を履み善を修めねばならぬ所以を、嚴かに誡められた。されど、若し我々がこの嚴誡にのみ囚はれ、己が行爲の規準を

守ることに於いて、そこに自己罪福の功を誇るものがあるとすれば、それはまさに彌陀の願力を傷けるものである。何故なら、釋尊が悲化を垂れ給ふ意趣は、全く人間生活の愚かさ哀れさを說いて、彌陀の願力に乘ずるより外に、我等衆生の救はるべき道なきことを知らしめ、それ故に離れむとして離れ得ぬこの毒惡の生活に、さし寄せ給ふ本願の眞實を受けては、力弱き中からも眞實の生命に生かされて、諸善をなし衆惡を遠離せねばならぬと、敎へられた點にあるからである。されば、我々が自己の作善を恃み、自己の修德を誇つて、そこに救濟の因を求むるならば、我々は彌陀の願力を忘れ、釋尊の悲化を誤るものと云はねばならない。まことに、我々が無上大利の極證を得るのは、福德を積み道德を履むからではなくて、明信佛智と如來の眞生命を惠まれて、如來の生命を自己の生命とし、佛の願力が我々衆生の上に實現せられたからである。こゝに、罪福信を誡め、明信佛智の信境を開顯せられたのが、次の智慧段なのである。

明信佛智の開顯

されば、彌勒に對して生死流轉の苦と五惡の業とを說き給うた釋尊は、また改めて阿難に對して、無量壽佛を禮せしめつゝ佛智の不思議を信ずべきを說き給うた。これ卽ち、悲化に依りて智慧の門を顯開せるものである。

從つて、釋尊が阿彌陀佛の淨土を現はして、親しくこれを衆生に見せしめ、彼の阿彌陀佛の宏大なる智慧の御はたらきを開示して、これを信ずるものゝ利益とこれを疑ふものゝ損失とを分ち、以つて疑を誡め信心を勸められたことは、ひとへに阿難を始め之を拜するものをして、明かに佛智を信ぜしめんが爲であつた。それ故に、阿難の見せしめられた無量壽佛とその國土とは、たゞ無邊の光の中に現れるものであつた。一切は光の中にあつて光に輝く、それは眞に佛智の無邊なるを物語るものである。然るに、その光の世界の中に、胎生のものと化生のものとの別あることが、釋尊によつて示されてゐる。何故に、淨土にかくの如き二生の差別があるのであらうか。

胎生と化生

胎生

胎生の因は佛智を疑惑して罪福を信ずるものである。卽ち、阿彌陀佛の智慧を疑惑し、自ら修した善根功德に依つて彼國に生れむとするもの（諸行往生）、又、佛智、不思議智、不可稱智、大乘廣智、無等無倫最上勝智を疑ふことを意

識せずとも、しかも罪福因果の理を誤り、自ら彌陀の名號を稱へ、その功德に依つて彼國に生れむとするもの(自力念佛往生)は、胎生者であらねばならない。かくして、胎生者は佛智を疑惑するが故に、眞實の智慧なきものと云はれる。そして、眞實の智慧なきが故に、淨土に往生するも五百歲の間、(一)佛を見奉ることが出來ず、(二)經法を聞くことも出來ず、(三)聖衆を拜む事が出來ず、(四)佛を供養せんに由なく、(五)菩薩の法式を知らず、(六)功德を修習することが出來ない。それは、宛かも轉輪聖王の王子が七寶の牢獄に繫がれる如く、それが如何に麗はしい宮殿であつても、不自由にして樂を受くることは出來ないのである。

化生

これに反して、明かに佛智を信じ、諸の功德の總體たる阿彌陀佛の御名を稱へ、他力の信を得て念を彼國に向けるものは、命終の後彼國に生れて、光明も智慧も功德も皆彼の國の菩薩と同じ樣になることが出來る。これを化生といふ。されば、胎生者は「識二其本罪一深自悔責求一離二彼處一」めねばならない。實に、疑惑するものは大利を失するが故に、願生者は明かに佛智を信じて化生の人とならねばならない。かくて、信心の智慧に依つてのみ淨土の門の開かれる所以を示したのが、顯開智慧段の要旨なのである。

化生者の數

然らば、彼の世界にかくの如き化生者は如何程あるであらうか。こゝに、彌勒は「この世界にいくばくの不退の菩薩があつて、彼の國に生ずるか」と問ひ、佛はこれに對し、この國には六十七億の不退の菩薩があつて皆かの國に往生し、その他十四佛國の無數の菩薩及び十方世界の無量の佛國からも、往生者は數限りないと答へてゐられる。されば、不退の菩薩とは明信佛智の信心の行者であつて、如來の本願を聞いて願生者となつたものである。かくて、本願の大道は明かに顯示せられて、經の正說は終るのである。

第五章　不滅の法燈

流通分

かくて、最後に釋尊は彌勒に向はせられ、この敎說を信受して末の世ながく傳ふべきことを付屬せられた。これ所謂流通分である。

まづ、釋尊は念佛往生の大利を示して、「其有得聞彼佛名號歡喜踊躍乃至一

念當知此人爲得大利」と示させられた。この事は、既に我々が正宗分に於いて十分明かに領解せしめられた所であつて、こゝに我々の注意すべきは、却つてかくの如き妙法を得ることの如何に難いかといふことである。併し、それが如何に困難であつても、その外に眞實の功德を得るの道なきを知るならば、設ひ三千大千世界に滿つる大火をも過ぎて、この法を聞くべしと說かれる教意をこそ領受すべきである。

特留此經止住百歲の意

然るに「今爲諸衆生說此經法」かれたのである。されば、我等衆生はまさに疑惑することなく、眞正にこの唯一の經法を信受せねばならない。まこと、それは唯一の聖法である。それ故に「當來之世經道滅盡」せんも、尙「我以慈悲哀愍」特留此經止住百歲」たらしめ給ふのである。實に、百歲とは單に百の限定數を意味するものではないであらう。寧ろ、百なる滿數に依つて、この『大經』所說の本願念佛のみが、永遠不滅の法なることを示したものである。斯の經に値ふ衆生の皆得度する所以は、此の經法が最易なると共に、最勝なるが故に、不滅の法燈であることを意味するのでなくてはならない。こゝに『大經』の絕對價値が表示せられてゐる。

如來の興世

まことに、如來の興世には値ひ難い。然るに、我等は今佛の敎法を聞く事に依つて、如來の興世に値ひ得るのである。げに、如來の興世に値ふとは諸佛の經道を聞くことである。諸佛の經道を聞くとは、またこれ菩薩の勝法を聞くことである。しかも聞くとは單に耳に聞くのではなく、佛願の生起本末を聞いて疑心あることなきを意味する。如來の敎法に絕對的な信順を捧げるものこそ、如來の興世に値へるものと云ふべきであらう。

難中の難

然るに、佛願の生起本末を說く眞の善知識に値ふことは更に難い。善知識とは、實に唯一眞實の聖法を敎ふるものである。されば、如來の本願を敎ふるものこそ、眞の善知識と云ふべきであつて、かゝる善知識に遇ふことは難いのである。よし、幸にかゝる善知識に遇ふとも、その敎を聞き能く行ずることは更に難いのである。されば、經には最後に「聞斯經信樂受持難中之難無過此難」と說かれてある。こゝに、我々は如來本願の敎法が我々に惠まれる最高唯一の聖價値でありつゝ、しかもそれが如實なる體驗內容として、

我々の心魂に味得せられることの如何に難いかを思はねばならない。そして、ひたすらにこの聖法を惠まれて生きる身の幸慶を感佩すべきであらう。かくて『大無量壽經』の教說は終つてゐる。

觀無量壽經要義

第一章　王舍城の悲劇

念佛の大法興起

善きも惡しきも、たゞ念佛して救はれる『大無量壽經』の聖法、それは如何にして此の世に興起したのであらうか。眞實の法を出現せしめるものは眞實の機でなくてはならない。されば、愚かなる人の姿、慘ましき世の相が念佛の大法を出現せしめたのであると云つていゝ。

大經と觀經　韋提希

かくて、『大經』が眞實の法を顯彰せるものであるに對し、『觀經』はまさにこの大法に救はれるべき機の眞實を示せるものである。それ故に、『觀經』は阿闍世の惡逆に悲泣する實人生の代表者として、韋提希夫人を主人公とし、そこに念佛の大法を展開したものである。

王舍城の悲劇

即ち、王舍城の主頻婆娑羅の太子に阿闍世なるものがあつた。惡友提婆の教へに順つて、父王頻婆娑羅を七重の室に閉ぢこめ、何人にも近づくことを許さなかつた。こゝに國の

大夫人なる韋提希は、大王を救はんが爲に密かに食を運ばれたので、王は身力を保つことが出來たと共に、また遙かに耆闍崛山にまします世尊を禮し、佛の教法を受けることに依つて心力を養はせられた。從つて、三七日を過ぐるも御氣色は少しも變らず、却つて顏には和悅の色さへ滿ちてゐた。然るに、守門の者からこれを聞き知つた阿闍世は大いに怒り「我母是賊」といきりたち、無道にも母を害せんとした。これを見た耆婆・月光の二大臣は身を以つて諫め、漸く母を殺すことを止まらしめたが、遂に阿闍世は母后を深宮に閉ぢこめるに到つたのである。

善導大師の教示

然らば、かくの如き悲劇は如何にして起つたのであらうか。善導大師の教へられる所によれば、もと頻婆娑羅王と韋提希夫人との間には長く王子がなかつた。或る時、相師に見せしめられた所、相師は「ひとりの仙人が遠からず死んで、更に大王の御子となつて生れ給ふであらう」と申し上げた。けれども、大王は仙人の命が終るのを待つことが出來ず、尙命數のある仙人を殺さしめられた。果せるかな、夫人は懷胎せられたので大王は非常に喜び、更に相師に見せしめられた。然るに、相師は「この子生れて仇を報ゆるでありませう」と申し上げた。それがため驚き怖れた王と夫人は、太子を高樓から產み落して殺さんとせられた。けれども、太子は僅かに手の指を折つたのみで、命を全うすることが出來た。このことを提婆から聞いた阿闍世は、雨行大臣の證明に依つて愈々憤怒に滿ち、こゝに父と子、母と子とが、血で血を洗ふ樣な慘しい悲劇を演ずるに到つたのである。何といふ慘しい人の姿、世の相であらうか。

現實人生の的示

思ふに、釋尊がこの王舍城の悲劇を此經の始めに示させられたことは、ひとつの特異な事實として表はされたものではなく、却つて實人生の一般的事實をこれに依つて的示せられたものである。勿論、世の多くの人々は自らの手を下して父を殺し、また母を害するものは數少いでもあらう。併し、我々の內面の世界にあつては、常に父母を殺し、朋友を害し、常に自己をのみ中心として、互に殺し合ふ生活をしてゐるのが、僞らざる我々の現實ではないか。されば、この慘しい人の心と世の相に氣付くものは、誰かこの苦惱の

人生の外に、苦惱のない世界を求めずにゐられようか。實に、『觀經』は此の現實の慘しい姿を問題として、その問題を解決する鍵が現實には求むべくもなく、却つて現實を超えた彼岸の淨土にこそ求むべきである事を敎へたものに外ならない。

韋提希の願生淨土

かくて、人生最大の苦惱に直面した韋提希は、この苦惱を母胎として願生淨土の思念を起した。卽ち、牢獄に閉ぢこめられた韋提希は遙かに耆闍崛山を拜して、世尊の哀れみを乞うた。然るに、悲泣雨涙、遙かに佛を禮せる韋提希が未だ頭を擧げない中に、世尊は阿難目連と共に夫人の前に姿を現はし給うた。こゝに韋提希は身を地に投げて號泣し、「我宿何罪生此惡子」と歎き悲しみ、「唯願世尊爲我廣說無憂惱處」と願うた。世尊はこの切なる願ひに應じて、眉間の白毫から放たせらるゝ光明の臺の中に、十方諸佛の數多き淨土をあらはして、夫人に拜ましめ給うた。然るに、韋提希はその中から阿彌陀佛の極樂世界に生ぜんと樂ひ、「唯願世尊敎我思惟敎我正受」と願うた。かくて、韋提希の救はれる道は開けたのである。それ故に世尊がその時「卽便微笑」せられたことは、單に韋提希の救はれる道が開けたからのみではなく、それに依つて阿彌陀佛の本願が、全く苦惱の衆生の爲のものであることを明かにすべき機會が來たからなのである。今や淨土の門は開け、未來惡衆生の救ひが用意せられた。されば、『觀經』こそはまさに韋提希に代表せらるる全人の救はれる道として、世尊の微笑より現はれ、その素懷を遂げられるものでなくてはならない。

【註】一般に經典が序・正・流通の三に分科されることは先に述べた如くであるが、善導大師は『觀無量壽經』を五分に分けて解釋せられた。卽ち、これを圖示すれば左の如くである。

一、序　分
- 1 日　想　觀
- 2 水　想　觀
- 3 地　想　觀
- 4 寶　樹　觀
- 5 寶　池　觀

如是我聞
佛告韋提希汝及衆生
次作水想
此想成時
佛告阿難及韋提希
次當想水

- 二、正宗分
  - 定善十三觀
    - 6 寶樓觀 ― 衆寶國土
    - 7 華座觀 ― 佛告阿難及韋提希諦聽
    - 8 像觀 ― 佛告阿難及韋提希見此事已
    - 9 眞身觀 ― 佛告阿難及韋提希此想成已
    - 10 觀音觀 ― 佛告阿難及韋提希見無量壽佛
    - 11 勢至觀 ― 次復應觀
    - 12 普觀 ― 見此事者
    - 13 雜想觀 ― 佛告阿難及韋提希若欲至心
  - 散善三觀
    - 上輩觀 ― 佛告阿難及韋提希上品上生者
    - 中輩觀 ― 佛告阿難及韋提希中品上生者
    - 下輩觀 ― 佛告阿難及韋提希下品上生者
- 三、得益分 ― 說是語時
- 四、流通分 ― 爾時阿難卽從座起
- 五、耆闍分 ― 爾時世尊足步虛空

韋提希の致請

第二章　要門の開說

かくて、釋尊は韋提希の「敎我思惟敎我正受」なる請ひに應じて、「汝當繫念諦觀」「彼國淨業成者」「我今爲汝廣說」「衆譬」と宣ひ、しかも直ちにその衆譬を說くことなく、「亦令未來世一切凡夫欲修淨業者得生西方極樂國土」と云つて、世・戒・行の三福を說き、それを以つて三世諸佛の淨業の正因とせられた。これ善導大師に依れば、一切の衆生に二種の機があつて、單に定行に依つては定善の機を攝するけれども、散善の機を攝することが出來ない。こゝに、如來方便して三福を開き、以つて散善の機に應ぜんとせられたので、これ定善を以つて韋提の致請とし、散善を以つて佛の自開とする所以である。かくて、韋提希のために說かれた所の敎は、また同時に我々衆生のために說かれたものと領解される。それ故に、經には「如來今者敎韋提希及未來世一切衆生觀於西方極樂世界」と注意し、先づ以つて極樂世界の無量壽佛を觀たてまつる定善の觀法を說かせられた。

定散の二機

定善

定善とは息慮凝心として、慮を息め心を凝らして餘念を起さず、全き寂靜の精神狀態に於いて、彼の淨土の國土と佛と菩薩とを漸々に觀想し、その修行の功德に依つて淨土に往生せんとするを云ふ。されば、定善十三觀とは淨土を觀想する順序次第を說いたものであつて、先づ初めに日想觀・水想觀に依つて假に淨土の相を觀想し、次に地想觀・寶樹觀・寶池觀・寶樓觀に依つて正しく淨土の莊嚴を觀じ、進んで佛の座し給ふ華座を觀じ、次に佛の像を觀じて眞身觀に入り、眞身を觀じ終つて更に觀音と勢至とを觀じ、その他の莊嚴を普く觀じ、別に雜想觀といふをなすのである。

散善

次に、散善といふのは廢惡修善の道であつて、心の散亂せるまゝで惡を廢め善を修し、この功德に依つて淨土に往生せんとするを云ふ。凡そ、その善に世・戒・行の三福三善がある。世福は父母孝養、奉事師長慈心不殺、修十善業等といつた世間一般の善行をいひ、戒福は受持三歸、具足衆戒、不犯威儀等といつた佛教特有の善行をいひ、行福は發菩提心、深信因果、讀誦大乘、勸進行者等といつた佛教の修行をいふ。蓋し、かくの如き善行は幸福を生む母であるから福德と名づけられる。而して、釋尊は此等の三福を實修するに就いて九品の機のあることを說かれた。卽ち、上品上生・上品中生・上品下生の三品は大乘の善を修して往生を願ふ凡夫で、世・戒・行の三福の中、主として行福を修めるものである。この行福を修めた功德に依つて淨土に往生するものを、上輩往生者と名づける。次に、中輩往生者は小乘の善を修する凡夫と世間の善を修する凡夫であつて、中品上生・中品中生の凡夫は三福の中主として戒福を修め、その功德に依つて往生するものであり、中品下生の凡夫は佛教外の凡夫で、三福の中世福を修することに依つて往生するものである。下品上生・下品中生・下品下生の下輩は三福無分とて、三福の一分をも修することなく、たゞ惡を作す所の凡夫である。しかし、かくの如き凡夫も臨終に念佛を稱へることに依つて往生するを得る。殊に、下品下生の衆生は五逆十惡など凡ゆる惡業を犯したものであるが、臨終の時善知識から南無阿彌陀佛を稱へよと敎へられ、十聲念佛を稱へて遂に淨土に往生するので、それはまことに息のつまるやうな場面である。かく九品の機類に應じて、九品

往生の相を說いたのが散善三觀の一段である。

定散の說意

しかし、こゝで顧慮せなければならぬことは、此等の定散二善が何れも自力の行たることであつて、果して愚惡の衆生たる我々に、これを立派に成し遂げ得る能力があるかどうかといふことである。若し、定善も散善も到底眞實の意味に於いて行じ得ないとすれば、かくの如き定散二善を我々のために說かれた釋尊の內面には、更に深い意趣が秘められてゐるのでなくてはならない。

要門の意味

實に、定散二善が淨土に通入する肝要の門と云ふ意味で、要門と名づけられ、又、遂に念佛往生の他力信心に轉入する必要の門といふ意味で、要門といはれるのは、この定散二善が一切の衆生を誘引して、他力念佛の敎法に歸せしめる爲であることを示すのである。されば、定散二善は愚惡の我等衆生には到底堪へ得ないものであり、また定散二善そのものは直ちに淨土往生の因ともならない。却つて、定散二善に依つて一切衆生を導き、遂に本願他力の念佛に歸せしめる所に、要門開說の意味があつた。然らば、かくの如き意味は如何にして確められ得るであらうか。

第三章　弘願の顯彰

觀經と大經の相關

かくて、『觀經』の正宗分に釋尊が定散二善を說かせられたことは、實は釋尊の方便であつて、その本意は全く彌陀の弘願を顯彰せんが爲であつたことを知らねばならない。この點に於いて、『觀經』は『大經』と著しい對照をなすもので、『大經』の說かれる場合には、釋尊は彌陀三昧に入つて如來の本願を說かれ、從つて、釋尊の人格は內にかくされ、表面にあらはれるものは、却つて彌陀そのものであつた。然るに、『觀經』はかくの如き彌陀は表面にあらはれることなく、韋提希の爲に救ひの法を說き給うた釋尊のみが、大きく描き出されてゐる。併し、釋尊の胸奧に祕められた究極の救ひの法は、實に彌陀弘願の法の外にはないのであつて、このことは要門を說き給うた經說の諸所にその片鱗をあらはすのである。これ、古來弘願顯彰の場所といはれる所のものであつて、第七華座觀、第九眞身觀及び下上品の各々にあらはれてゐ

弘願顯彰の場所

る。

弘願

弘願とは廣弘の願といふ意味であつて、常沒常流轉の衆生を救はんとの無限の大悲から、一切衆生を洩すことなく往生せしめ給ふ念佛往生の誓願であつて、『大經』の歸結たる第十八願の旨趣を意味せるものである。この弘願の意趣が要門の教說を壞すことなく、實に巧妙に說かれたのが弘願顯彰の三個の文である。

華座觀

卽ち、第七華座觀に到つて、釋尊はこゝに改めて韋提希に對し「當爲汝分別解說除苦惱法」と告げられた。然るに、その聲の終ると共に、釋尊は却つて苦惱を除く法を說かれることなく、宛かも聲に應ずるが如く、無量壽佛が二菩薩と共に空中に住立して、韋提希の前にあらはれ給うた。凡そ、かくの如き經說は何を意味するのであらうか。思ふに、除苦惱法を說き給ふべき釋尊に代つて、そこに無量壽佛が現ぜられたことは、それこそ釋尊の內意を示すものであつて、無量壽佛の顯現に衆生往生の證據を示させられたのである。卽ち、無量壽佛は念佛の衆生往生せずば正覺を取らじと誓ひ給うた本願成就の彌陀であつて、その光明熾盛なるは、全く無限の大悲を以つて無邊の極惡人を救ひ給ふ大悲廻向の姿である。されば、韋提希はこの佛身を拜するなり、念佛往生の理を領解して往生を決定した。これ、無量壽佛こそ稱我名號の本誓を成就して、念佛の衆生を攝取し給ふ姿に外ならないからである。こゝに、韋提希は佛身を拜することに依つて佛心を領解し、聞其名號信心歡喜したのである。かくて、定散要門の行を說き給うた釋尊と、念佛の一法を敎へ給うた彌陀と、二尊二敎の敎旨の上に、却つて常沒常流轉の凡夫が救はれる要法は、たゞ彌陀弘願の外ないことが示されてゐるのであつて、こゝに二尊一致の密意を窺ふべきである。

眞身觀

次に、眞身觀には本願成就の佛身の相として、その光明は「徧照十方世界念佛衆生攝取不捨」ることが說かれてゐる。卽ち、眞身觀にあらはれる佛身には八萬四千の相好がましまして、正しく報身の德が表示されてゐる。その一々の相にまた八萬四千の隨形好があり、一々の隨形好にまた八萬四千の光明があつて、この光明遍く十方世界を照して攝益を垂れ給ふ。然るに、そ

の攝益を蒙る念佛衆生とは、觀念の行者ではなくて稱名念佛の行者である。これ、觀念をこらすことは本願の行ではなく、まさに念佛のみが本願相應の正行たるが故である。從つて、定善觀を修する行者の觀成ずる時、却つて稱名念佛の行者のみが攝益を蒙ることを知つて、遂に弘願に轉入するに到る。されば、彌陀の光明が遍く十方を照しつゝ、而かも念佛の衆生を攝取するのは、これ別意の弘願を顯彰するものではないか。

下品上生の文

更に、下上品にあつては一生造惡の凡夫に對して、智者が「合掌叉手稱『南無阿彌陀佛』」とすゝめ、行者は稱名の功に依つて五十億劫の罪を滅し、「汝稱『佛名』故諸罪消滅我來迎『汝』」といふ化佛化菩薩の讃嘆を受けてゐる。この場合、化佛化菩薩が彌陀に代つて行者の前に現はれ、定散諸行のためではなく、佛名を稱する故に我來つて汝を迎ふと云つてあるのは、本願の念佛が佛心相應の行なることを示すのであつて、こゝに亦よく別意の弘願が顯彰されてゐる。

觀經の幽意

かくて、『觀經』は表面的には釋尊が定散要門を說き給うた經であるけれども、その要門の教說を壞すことなく、彌陀別意の弘願が華座觀の佛身、眞身觀の光明、下上品の讃嘆等に依つて、仄かに顯彰されてゐる。されば、釋尊は定散要門を教へ、彌陀は弘願念佛を說き給ふが如く、一應は二尊二教に別れるけれども、その密意を窺へば、定散を說き給ふことは一切の衆生を誘引する方便であつて、窮極的には、弘願念佛に歸せしめんが爲の經說なることを思ふべきである。

第四章　廢立と隱顯

念佛の付屬

定散二善を說くことに依つて正宗分を終らせられた釋尊は、流通分に到つて阿難に對し、「汝好持『是語』持『是語』者卽是持『無量壽佛名』」とて、今迄一經の正宗分に長々と說いて來た定散二善を忘れたかの如く、念佛の一行を付屬せられた。かくの如く、釋尊が阿難に付屬するに定散二善を以つてせず、たゞ念佛の一行を以つてせられたことは、そこに何等かの意味がなければならない。卽ち、正宗分に於いて定散二善を說き、淨土に往生せんとするものが、

己に應へる行法を取つて修行し、それを淨土に廻向して往生せよと說き給ふことは、實は釋尊の本意ではなく、たゞ念佛の一行を以つて往生淨土の要法なりと示させられた所に、この經の深意が示されるのである。それ故にこそ、要門を說く中にも時に弘願の意を仄めかして、その片鱗を彰はしめられた。然らば、釋尊は何故に直接彌陀弘願の法を說かず、要門定散の法をのみ長々と說き給うたのであらうか。

本願の正意

こゝに於いて、我々は更に彌陀の本願が如何なるものであつたかを想起しなければならない。既に述べた如く、彌陀の本願は四十八あるけれども、正しく往生淨土の正因を誓つたものは、諸行往生の第十九願、自力念佛往生の第二十願、他力念佛往生の第十八願の三願であつた。然るに、若し第十九願を以つて佛の正意をあらはすものとすれば、造惡不善の凡夫は如何にして往生することが出來るであらうか。例へば、諸行の中、造像起塔を以つて本願となせば、貧窮の者は往生の望みを絶たねばならない。また、智慧高才を以つて本願とすれば、下根下智のものは往生の望みを絶たねばならない。

或は持戒持律を以つて本願とするならば、破戒無戒の人は如何にすべき。しかも世間の實際の相に於いては、富めるものは少く貧しきものは多い。又、智慧あるものは少く愚かなるものは多い。或は持戒持律のものは少く破戒無戒のものは多い。されば、定散の諸善を以つて往生淨土の行とすれば、少數のものは救はれるけれども、多數のものは救はれないことゝなる。かくの如きは、一切の衆生に大安を得しめんと願ひ給うた佛の本意ではない。然るに、念佛の一行は富めるも貧しきも、賢きも愚かなるも、罪障の重きも輕きも、ひとしく稱名念佛すれば往生し得るが故に、念佛の一行を往生の行とし給うたのである。これ實に第十八、第二十の二願に念佛の行を往生の行とし給ふ所以である。然るに、第二十願の念佛は自ら稱ふる稱名の功德に力を入れ、そこに自力の功を誇るものである。されば、この二十願を以つて佛の本意とするならば、數多く念佛を稱ふること能はざるものは、遂に往生の望みを失ふに到るであらう。まことに、煩惱熾盛の凡夫は心散亂して、一心不亂に彌陀の名號を稱念することは難い。かくて、第十八願に誓は

れた他力の念佛は、名號の謂れを聞いて疑はず、至心に信樂して自然に口にあらはれる念佛であるから、如何なる愚痴無智造惡不善の凡夫と雖も、これを信じこれを行じて往生を決得することが出來る。かくて、第十八願にこそ、まさに佛の本意があるのであつて、如來が第十八願に餘行を以つて往生淨土の行とせず、たゞ念佛の一行のみを眞實報土の因とせられたのは、かくの如き大悲のあらはれと戴かれる。又、それ故にこそ、釋尊は『觀經』に於いて正宗分に長々と定散の諸行を說きつゝ、しかもそれはたゞ定散の諸機を誘引する爲のみであつて、遂に流通に到つてはこれを廢し、たゞ念佛の一行を立て給うた。かくて、善導大師は『散善義』の終りに「上來雖說定散兩門之益望佛本願意在衆生一向專稱彌陀佛名」と說かれたのである。まことに、念佛はその法體に就いて云へば餘行に比して大いに勝れ、又機の趣入に就いて云へば甚だ修し易いから、釋尊は韋提希に卽して一切衆生の救はれる道として、諸行を廢し念佛を立て給うたのである。これ、古來廢立釋と稱する所のものであつて、七祖の中では道綽禪師に芽生へ、善導大師に依つて花が

善導の釋義

廢立の意義

隱顯釋

咲き、元祖法然聖人に依つて實つた深い『觀經』の解釋である。

然るに、善導大師の釋意を能く把握せられた宗祖聖人は「依釋家之意」按「無量壽佛觀經」者有顯彰隱密之義」と云つて、こゝに所謂隱顯なる見方を己證せられた。蓋し、さきの廢立釋に依つて、『觀經』の正意が流通付屬の念佛に在ることは能く知られ得るけれども、その念佛が如何なる念佛であるかは、直ちに知り難いものがある。卽ち、正宗分に於いて、定散二善の間に說かれた所の念佛、――定散自力の心を以つて稱へる念佛――を別立して、それを付屬せられたとすれば、自力の念佛が『觀經』の歸結となる。又、この念佛を如來の本願に願み、定散二善とは質を異にした他力の念佛を付屬せられたものとすれば、他力の念佛こそ『觀經』の歸結となり、その何れが『觀經』の正意を得るかは直ちに決し難い。尤も、善導はこれを「佛の本願に望めて」他力の念佛としたけれども、行々相對の上に立てられた廢立釋だけでは、猶意を盡さぬものがある。こゝに於いて、宗祖は釋家善導の意、卽ち三心釋の意趣を願みて、『觀經』を隱顯兩重に觀察し、「定散諸機各別の、自力の三心(顯の義)ひる

がへし、如來利他の信心(隱の義)に、通入するを『觀經』の歸趣とし、更に廢立釋を詳しくせられた。かくて『觀經』は、顯に依れば定散諸機各別の定散の諸行を說くけれども、隱に依れば弘願他力の念佛の一法を說くものと、その幽意を明かにせられたのである。

阿彌陀經要義

第一章　無問自說の經

無問自說經

この『阿陀彌經』は、古來無問自說の經と云はれてゐる。卽ち、釋尊は常隨の弟子たる舍利弗を相手として、恰かも愛兒に諄々と諭すが如く、全く平常の心を以つて、念佛の敎法を說かせられた。無問自說とは「この經をときたまひしに如來にとひたてまつる人もなし、これすなはち釋尊出世の本懷をあらはさんとおぼしめすゆへに無問自說とまうす」(『一念多念證』文十五右)のであつて、一經中舍利弗は一度も釋尊に向つて問ひを出すことなく、たゞひたすらに佛陀の經說に聞き入つてゐる。こゝに此經の特殊な風格を見ることが出來る。

阿彌陀經の特異性

もと、無問自說といふことは、佛十二部經の一で、諸經の中にも一品一章等に就いては往々その例を見るのであるが、しかも無問自說せられる意味は、佛隨自意の說であることを示す。然るに、此の經にあつては、隨自意の說と

して甚深微妙の法を說くといふ意味ではなく、却つて尋常の心を以つて說かれた所に特異の點が存し、從つて無問自說は一經全體に亘り、佛陀の舍利弗を呼びかけ給ふこと三十六度に及ぶも、舍利弗は一言をも發することなく、唯々として聞き惚れてゐる。それ故に、この經には發起序もなく、また特別の流通付屬の文もないのであつて、こゝにも佛陀釋尊が如何に親しき心もて舍利弗に接し、自己出世の本意たる淨土念佛の敎へを、靜かに語り給うたかを察することが出來る。

舍利弗

しかも、『阿彌陀經』にあつて、特に舍利弗を對告衆とせられたことにも、特殊な意味を窺ふことが出來るのであつて、舍利弗は佛弟子の中に於いて智慧第一と謳はれた人である。その舍利弗が一言を發することなく此經を信受したことは、智慧勝れたる舍利弗が却つて愚惡の凡夫にかへつて、自己の智慧を働かすことなく、ひたすらに聞法した姿を示すものである。少くも、此經に於ける舍利弗は、謙虛なる聞法者として一切の濁惡なる衆生を代表したものであり、それ故に、善導大師が「身子に告ぐるは普く苦の衆生に告ぐ」るのであると云はれたことも、そのまゝに領解し得る。

阿彌陀經と舍利弗

されば、また、願生淨土の行たる念佛こそは、一切苦の衆生が步むべき智慧の道たることも、此經の示す意味でなくてはならない。このことは智慧勝れたる舍利弗にして、始めて領解し得るのであつて、こゝに此經の尊い意味がある。かくて、『大經』が廣く念佛の大道こそ一切衆生の救はるべき唯一眞實の法たる所以を示し、『觀經』が念佛の法にあらざれば、一切苦の衆生の救はれざる所以を示して、我々衆生の僞らざる姿を知らしめ給うたに對し、『小經』はこれ等の機法の眞實の上に、たゞ念佛往生のみが說かれてゐることを、この經が三部經の結經であるのみならず、更に一代佛敎の結經たることを示すのである。されば、『阿彌陀經』の無問自說經たることは、佛陀の自覺內容を最も親しき言葉に於いて語られたものとして、特殊の意趣を仰ぐべきである。

【註】阿彌陀經の文科は左の如くである。

一、序分……如是我聞
二、正宗分
　讃極樂淨土……爾時佛告
　勸念佛往生
　　念佛往生……舍利弗衆生
　　證誠勸信……舍利弗我見
三、流通分……佛說此經已

第二章　淨土の莊嚴

依正二報

佛陀の說法は「從是西方過十萬億佛土有世界名曰極樂其土有佛號阿彌陀」今現在說法といふ言葉、卽ち、淨土の依正二報の莊嚴を讃嘆することに依つて始められてゐる。こゝに淨土を西方と指示せられたことは、旣に『大』『觀』二經の上にも見ゆる所であるが、それは西方が道綽禪師の明かにせられた如く、萬物の終歸する所と領解すれば足りるであらう。しかも、その淨土は十萬億佛土を過ぎた所にあると敎へられてゐる。併し、『觀經』にあつては、釋尊は「去此不遠」とも說かれてゐる。思ふに、淨土は十萬億佛土に過ぎたる

西方の指示

過十萬億佛土と去此不遠

殊勝微妙の世界でありつゝ、また願力に乘じて一念須臾の間にたやすく往生せしめられるから、それが此土に比較して無上殊勝のものたることに於いて遠く、又、如何に逆惡のものもたやすく往生し得ることに於いて、極めて近いとも味はるべきであらう。そして、この淨土にあつて彌陀が現に說法しましますといふことこそ、特に注意せらるべき點である。まことに、彌陀は一切の衆生を救濟せんが爲にのみ成道せられた佛である。されば、彌陀の正覺成就こそは、現に衆生救濟の機能が行はれてゐることを意味する。しかも、救はれねばならぬ迷妄の衆生は現に現實の痛苦に惱んでゐる。惱み苦しむ衆生の現にあることこそ、佛が現に說法しまします明證であらねばならない。それ故に「今現在說法」の經說は、特に注意すべき言葉であつて、名號を執持するものは、この永遠の現在なる說法を聞くものと云はねばならない。

今現在說法の意義

かくて、この西方阿彌陀佛の國土は「其國衆生無有衆苦但受諸樂」るが故に極樂と名づけられる。而して、この國土に衆苦なきことは實に國土そのも

極樂の莊嚴

のゝ德であつて「是故彼國名曰極樂」ふのである。されば、極樂はそれ自ら無量の莊嚴を具足してゐる。寶樹・寶池・天樂・金地・妙華・鳥音・風音・說法等、その微妙なる姿は彼の國が無爲涅槃の境地たることを示す爲の、人意を盡した描寫とも云ふべきであらう。けれども、これ等の莊嚴に就いて注意すべきはそれが「皆是阿彌陀佛」なることである。卽ち、釋尊は淨土の衆鳥に就いてそれが罪報所生のものでないことをあらはして「皆是阿彌陀佛欲令法音宣流」變化所作」と述べてゐられる。されば、此經に說かれる極樂莊嚴は單なる象徵でもなければ、また單なる因順餘方の譬喩であると考ふべきでもない。

皆是阿彌陀佛

それは莊嚴そのものゝ上に佛法を本具するものであつて、莊嚴そのまゝが阿彌陀佛であり、如來願心の表現に外ならないのであつて、それ故にこそ莊嚴そのものから、自然に念佛念法念僧の心を生ずるのである。

かくて、極樂の依報莊嚴は、皆これ主莊嚴たる阿彌陀佛の成就せられた所である。何故に、此の佛を阿彌陀と號けるのであらうか。經には「彼佛光明無量照十方國無所障礙是故號爲阿彌陀」と云ひ「彼佛壽命及其人民無量無邊阿僧祇劫故名阿彌陀」と云つてある。思ふに、淨土の經典は畢竟阿彌陀佛の御名の宣說である。それはこの御名こそ、衆生の救はれる所以の法だからである。されば、光明無量の故に阿彌陀と號け、壽命無量の故に阿彌陀と號ける彌陀の名義こそ、この經にあつても最も重要な點である。阿彌陀の名に顯はされた佛德が光明壽命の二無量であることは、それが實に如來の屬性として必然のものだからである。それ故に、佛自らこれを以つて德とし、これが名に施され、釋尊に依つて說き出された。實に、光明無量は空間的遍滿を示し、壽命無量は時間的常住をあらはすものであつて、絕對無限の世界、眞如一實の眞理を全うせる阿彌陀佛なることを示すのである。何故なら、この二無量の中には他の如何なる佛德をも內包し得るからである。かくて、光明無量壽命無量の故に阿彌陀と名づけ奉る。

阿彌陀佛

人民の壽命

然るに、こゝに注意すべきことは、彼の佛の壽命のみならず、その人民の壽命も無量なるが故に、阿彌陀と名づくることである。既に、彌陀が光壽二無量の二德を成就して、そこに正覺を成就せられた所以のものは、實には一切

衆生をして自己の淨土に往生せしめんが爲であつた。自己の淨土に往生せしめるとは、自己の如くならしめんとすることであつて、彌陀が光壽二無量の德を成就せられたことは、また同時に一切の衆生をも、自らの如く光明無量壽命無量ならしめ給ふことを意味する。されば、經には國土人民に就いて、壽命のみ無量なることが說かれてゐるけれども、それは自ら光明無量にも及ぶべきものと領解せしめられる。

淨土の土德

續いて、釋尊は彼の佛は「成佛已來於今十劫」と說かせられた。これは「今現在說法」の經說に對應する言葉であつて、彌陀の名告が十劫より現在に一瞬のたゆみもなく働かせ給ふことは、如何に趣の深いことであらうか。かくて、阿彌陀佛の傍には無量無邊の聖者がましまし、其處に生れる衆生は「皆是阿鞞跋致」即ち不退の位に住し、又「一生補處」に到る。こゝに充全な淨土の土德があらはされてゐる。されば、釋尊は次に「衆生聞者應當發願願生彼國」と勸め「所以者何得與如是諸上善人俱會一處」と讃えられた。

第三章　念佛往生とその明證

極樂往生の行

極樂はかくの如き無量の土德に莊嚴せられてゐる。從つて「不可以少善根福德因緣得生彼國」「聞說阿彌陀佛執持名號若一日乃至七日一心不亂」でなければ、彼の國に往生することは出來ない。

諸行と念佛

この經說は實に『觀無量壽經』の敎旨に照應するものであつて、執持名號以外の行を少善根と貶しめられたことは、定散の諸行を廢して念佛の一行を立てられたことに一致するものである。されば、この經は『觀經』が正宗分に定散二善を說きつゝ、流通に到れば念佛の一行を付屬して、一經の歸趣たゝ定散の諸機を誘引して、念佛の一法に入らしめむが爲であつた趣旨を受けて、更にこの念佛を說き廣められたものとも云ふべきである。實に、執持名號一心不亂の經說は、たゝ念佛一行と決定しての上の專修の相を顯はされたものである。されば、少善根福德の因緣たる諸行を以つてしては極樂に往生することを得ず、たゝ多善根福德の因緣たる念佛に依つて往生し得

るとあらはす所に、この經全體に溢れる念佛一行に就いての力强い教說が仰がれる。かくて、一心不亂に執持名號するものは「臨命終時阿彌陀佛與諸聖衆現在其前、是人終時心不顚倒、卽得往生阿彌陀佛極樂國土」るのである。

念佛往生

この故に、釋尊は「我見是利、故說此言」と云つて、一切衆生の救はれる道はただ念佛往生の外なきことを力强く示させられた。何れの行も及び難き煩惱具足の衆生にとつては、凡夫のまゝに姿を變へずして救はれる道、それは稱名念佛あるのみと彌深く信知せしめられる。

六方諸佛の證誠

しかも、かくの如き阿彌陀佛の不可思議功德は單に釋尊獨り讃嘆せられるのみではない、東西南北上下六方の諸佛、卽ち十方一切の諸佛がひとしく讃嘆せられる所である。凡そ、念佛往生といふことが我等衆生の救はれる唯一の道であることは、それが唯一なることに於いて普遍の道でなければならない。されば、諸佛の中にあつて一人でも念佛往生を讃嘆し給はぬならば、それは眞實に普遍の道と云ふことは出來ない。然るに、十方諸佛が「各於其國出廣長舌相徧覆三千大千世界說誠實言、汝等衆生當信是稱讃不可思議一切諸佛所護念經」と讃ぜられることは、それが一切衆生に修せらるべき普遍の法であることを明示するものと云はねばならない。

勸信と證誠

しかも、諸佛は單に念佛往生を勸信せられるのみではない。その勸信には、同時に證誠が伴つてゐる。勸信が證誠に依つて保證せられる時、我等衆生の信も自ら開けてくる。まことに、佛の善巧仰ぐべきではないか。されば、釋尊は次に「若有善男子善女人聞是諸佛所說名及經名者是諸善男子善女人皆爲一切諸佛共所護念皆得不退轉於阿耨多羅三藐三菩提」と說いて、彼の國への願生を勸められた。實に、聞名不退といふことは、念佛往生の道が十方衆生を洩らさぬことを明かにするものである。

難信之法

然るに、釋尊は「我於五濁惡世行此難事得阿耨多羅三藐三菩提爲一切世間說此難信之法是爲甚難」を說いて、この經を結んでゐられる。何故に念佛往生は難信之法なのであらうか。それは實に此土が五濁惡世であつて、自力貢高の心にかたまつてゐるからである。しかし、念佛は難信の法であつても難行の法ではないのであるから、各自に己の分限を省み、諸佛の證誠に導

かれて、これを信じこれを喜び稱へねばならない。かくて『小經』の教說は終つてゐる。

第四章　准知隱顯

念佛往生の姿

然るに、こゝに注意しなければならないことは、その念佛往生の姿であつて、經にはこれを次のやうに說いてゐる。

「舍利弗若有善男子善女人聞說阿彌陀佛執持名號若一日若二日若三日若四日若五日若六日若七日一心不亂其人臨命終時阿彌陀佛與諸聖衆現在其前是人終時心不顚倒即得往生阿彌陀佛極樂國土」

この文は先に注意した如く、『觀經』の流通分に呼應するもので、『觀經』に「汝好持是語持是語者卽是持無量壽佛名」と云ひ、今この『小經』に「聞說阿彌陀佛執持名號」と記してゐることに依つても知られ得る。而して、この文が定散二善を小善根小福德として廢し、それに對して若一日乃至若七日の念佛を立てぬいてゐることも、亦既に述べた如くである。併し、この『小經』に念佛往生を說く筆勢には、何か落ちつかない所がある。卽ち、「若しは一日乃至若しは七日、一心にして亂れざれば」とあるのは、そこに稱名の功を募るものにあらずやの感を抱かしめ、又、臨終に來迎の益を受けることも、諸行往生に見るが如く、如來の願心に充たされてゐないことを反證するやうにも見え、直ちにこの文を以つて純一無雜な弘願他力の念佛を說いたものとは思はれ難い點がある。されど又、この文の前後を注意するに、それは概ね佛の眞實をあらはしたものであつて、前に彌陀の名義を說いたのも、後に「我見是利」と云ひ、續いて諸佛の證誠を說いたのも、凡て佛の眞實を開顯せられたものに外ならない。こゝに於いて、宗祖は「准知觀經」此經亦應有顯彰隱密之義」（『御自釋』四九右）と云つて、この文の當相が本願の嘉號を以つて己が善根とする、所謂第二十願に誓はれた眞門自力の念佛を開說したものとし、しかも隱には弘願他力の意のあることを窺はれたのであつた。卽ち、宗祖はこれを善導の「三念五念佛來迎」（『法事讚』下一九右）の文に會合して、一面にはこれを能稱の功に拘る眞門自力の念佛を開說せる文とし、しかも他面には、そこに弘願他力の深意を

准知隱顯

徹見して「執言彰心堅牢而不移轉也、持言名不散不失也、一之言者名無二之言也、心之言者名眞實也」と釋し、以つてこの文の深意が不可思議の願海を光闡して、無碍の大信心海に歸せしめるものなることを明かにせられた。かくて、この經は「教頓機漸」の法を開顯するものとして、執拗な自力の機執を反省し、第二十願の誓意の如何に深いかを内感せしめるものと喜ばれたのであつた。

以上、三經の筋を叙しつゝその要旨を述べて來たが、この三經の相關々係は粗次のやうに結ぶことが出來る。

- 三經
  - 差別門
    - 眞假に通ずる差別
      - 大經―第十八願開說―弘願―眞
      - 觀經―第十九願開說―要門
      - 小經―第二十願開說―眞門　假
    - 眞實門中の差別
      - 大經―顯法之眞實
      - 觀經―顯機之眞實
      - 小經―顯機法之眞實
  - 一致門
    - 三經一眞實―弘願
    - 大經
    - 觀經（隱彰）
    - 小經（隱彰）―弘願―眞

第二編　七祖の要旨

第一章　龍樹菩薩

第一節　難易二道の教判

難易二道の教判

龍樹菩薩の教學に於いて、淨土教の開顯に對する第一の功績は、難易二道の教判である。凡そ、釋尊一代の教說は恰かも病に應じて藥を與へるが如く、時に順ひ機に應じて圓轉滑脫、あらゆる方面から出離得脫の道を說き示されたので、それが複雜な教學の發達を促し、半滿權實入り雜つて、頗る複雜多岐となるに到つた。從つて後世これを學ぶものは、何れが眞實の教であり、何れが方便の教であるかを見極める上に、非常な困難を感ぜざるを得なかつた。こゝに教判の開示は佛教を學ぶ上に於いて、頗る重要な役割を持つに到つたのである。

易行品

今、龍樹菩薩は佛教を大小の二乘に分ち、その小乘は大乘菩薩の死であるからこれを除き、大乘教に就いて難行道と易行道とがあることを示されたのである。『易行品』に云く。

「佛法有無量門如世間道有難有易陸道步行則苦水道乘船則樂菩薩道亦如是或有勤行精進或有以信方便易行疾至阿惟越致者。」

こゝに「阿惟越致」といふのは梵語であつて「不退轉」と譯される。凡そ、佛教の目的が成佛得道にあることは云ふ迄もないけれども、また不退轉の位に到れば自らその目的を達することが出來るから、古來の求道者は多くこの境地を求道の直接目標としたものゝ如く、今龍樹菩薩もこの不退位に到るに就いて、難易の二道を開いたのである。即ち、難行道は勤行精進の道であつて、飽くまでも自己の力を恃み、自己の智慧を磨いて成佛得脫せんとし、これに對して、易行道はかくの如き勤行精進の道が到底儚弱怯劣な我々の步み得べくもない道であることに目醒め、謙虛に彌陀の本願を仰ぎ、これに乘託して佛果を得んとするものである。彼は恰かも陸路を步行して目的地に達するが如く、此は恰かも船に乘つて海を渡るがやうである。

難行道と易行道

斯くて、佛果を得る爲の道は二あるけれども、深く人間の姿を省る時、たとひ難行道を志しても、それは結局自己の無能を自覺せしめられるに過ぎず、易行道のみが眞實の光として輝くのである。實に、易行道は何れの行も及び難い人間性に徹し、たゞ本願力に乘託して不退位に到らんとするもので、虔かに本願力に生かされてゆく純一な道である。

第二節　現生不退と稱名報恩

龍樹菩薩は難行道に對して、易行道を疾く不退の位に至る道とせられた。然らば、その疾く、といふは如何程に早いのであらうか。それは、難行道が諸々の難行を行じ久しくして得るに對し、たゞそれよりは比較的に疾いといふ意味であつてはならない。何故なら、龍樹は『易行品』に於いて、幾度も「即時入必定」と云ひ「菩薩於此身得至阿惟越致地」と述べて、不退の位に至ることを極めて現實的に示してゐるからである。されば「即時」は佛の本願力を信

する一念の端的を意味するもので、そこには少しの間隙も餘裕も認めないものである。卽ち「若人念我稱名自歸卽入必定得阿耨多羅三藐三菩提」（『易行品』八左）とか、或は「人能念是佛無量力功德卽時入必定」（『同』四〇）等と述べられてゐるのを見れば、何れも本願力を信受する一念に不退の位に入ることを明かにしたものである。

現生不退

宗祖聖人がこの龍樹の教へに基いて、現生にあつて正定聚の位に入る「此土不退」を高調せられたことは、それが眞宗教義の著しい特質をなしてゐることに於いて、特に注意すべきである。實に、不退の位は佛教一般の通念から云へば、非常に高い位であつて、淨土教に於いても、他の諸師は淨土に於いてのみ至り得る位とせられた程である。然るに、宗祖は本願の不可思議を顯彰して、此土に於いて不退に至り得ることを高調せられたのであつて、それはまた信仰の絶待性を打開いたものと窺はれるのである。

報恩の稱名

かくて、我々は彌陀の本願力を信ずる信の一念に、現生にあつて不退の位に至るものである。從つて、その信の一念から流れ出づる稱名は、もはや不退の位に至らんと願ふものではなく、却つて佛の救濟を感謝する報恩の意味でなければならない。それ故に、現生に既に不退の位に入る限り、その後の稱名はたゞ佛恩報謝の大行たることは明かであつて、之を龍樹は前引の文につゞいて「是故常應憶念」といひ、「是故我常念」と云つてゐる。

（正信念佛偈）

釋迦如來楞伽山
爲衆告命南天竺
龍樹大士出於世
悉能摧破有無見
宣說大乘無上法
證歡喜地生安樂

（念佛正信偈）

釋迦如來楞伽山
爲衆告命南天竺
龍樹菩薩興出世
悉能摧破有無見
宣說大乘無上法
證歡喜地生安樂

顯示難行陸路苦
信樂易行水道樂

造十住毘婆娑論
難行嶮路特悲憐

憶念彌陀佛本願
自然卽時入必定
唯能常稱如來號
應報大悲弘誓恩

易往大道廣開示
應以恭敬心執持
稱名號疾得不退
信心淸淨卽見佛

智度十住毘婆娑等
すゝめて念佛せしめたり。
龍樹菩薩となづくべし
世尊はかねてときたまふ。
大乘無上の法をとき
ひとへに念佛すゝめける。
難行易行のみちおしへ
弘誓のふねにのせたまふ。
おしへをつたへきかんひと

本師龍樹菩薩は
つくりておほく西をほめ
南天竺に比丘あらん
有無の邪見を破すべしと
本師龍樹菩薩は
歡喜地を證してぞ
龍樹大士世にいでて
流轉輪廻のわれらをば
本師龍樹菩薩の

本願こゝろにかけしめて
不退のくらゐすみやかに
恭敬の心に執持して（コヽロニトリタモツトイフ）
生死の苦海ほとりなし
彌陀弘誓のふねのみぞ
智度論にのたまはく
菩薩は法臣としたまひて
一切菩薩ののたまはく
無量劫をへめぐりて
恩愛はなはだたちがたく
念佛三昧行じてぞ

つねに彌陀を稱すべし。（トナフベシトナリ）
えんとおもはんひとはみな
彌陀の名號稱すべし。
ひさしくしづめるわれらをば
のせてかならずわたしける。
如來は無上法皇なり
尊重すべきは世尊なり。
われら因地にありしとき
萬善諸行を修せしかど。
生死はなはだつきがたし
罪障を滅し度脫せし。

第二章　天　親　菩　薩

第一節　一心の宣布

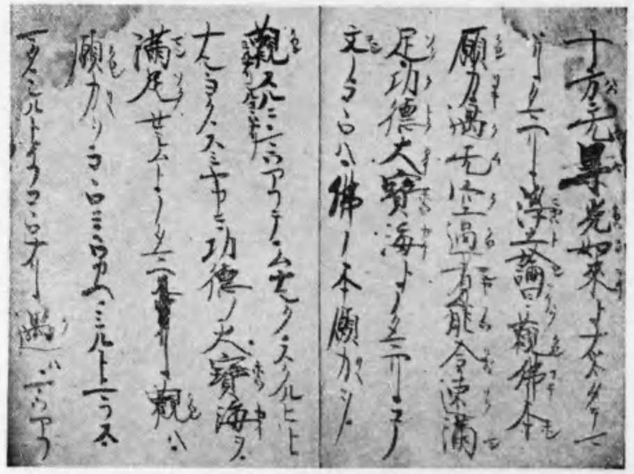
龍樹菩薩についで、易行道の開顯に努めた人は天親菩薩であつて、その主著『無量壽經優婆提舍願生偈』(通稱『淨土論』)は、その名の示す如く、無量壽經即ち淨土の三部經に關する論文(優婆提舍)を添へた願生淨土の偈である。

淨土論

この偈は、五言一句九十六行から成る豐麗な韻文であり、論文は深遠な意味を寓した散文で、曇鸞大師は前者を總說分と云ひ、後者を解義分と呼んでゐる。

この『願生偈』の初めに於いて、天親菩薩は自己の信境を披瀝して「世尊我一心、歸命盡十方、無礙光如來、願生安樂國」と述べてゐる。この文は忽ち見ると、本願の三心を領解して、至心を一心とし、歸命盡十方無礙光如來を信樂、また願生安樂國を欲生としたものゝ如く考へられる。併し、それは既

一心と三心



一念多念文意(宗祖眞筆)

に曇鸞が注意した如く、一心の語は天親の自督をあらはし、歸命盡十方無礙光如來願生安樂國といふは、その意味內容を顯示したものと窺はれるのである。即ち「一心」といふは二心なく疑ひなく佛に歸命することであつて、又そこに自ら願生の義を含むのである。かくて、天親は本願の上に三心と誓うてあるけれども、それは至心と信樂と欲生の三心を別々に起さねばならぬといふのではなく、却つてこの三心を我々衆生が領受する場合には、一心として領受すべきことを明かにせられたのである。彌陀を信ずる一心の中に、本願の三心はみな具はるのであつて「本願

三信機受一信樂」といはれるのは、この意味である。このことは天親の獨斷ではなくして、既に本願成就の文には三心を約して「聞其名號信心歡喜」とし、又、『小經』には直ちに「一心不亂」と說き、龍樹の『易行品』にも此語を用ひてゐるのであつて、天親はその微意を明かにしたより外なく、こゝに愚鈍の衆生をして解しやすからしめんとする婆心が窺はれるのである。このことは宗祖の『御本書』「信卷」の「三一問答」に委しく說かれる所である。

然るに、天親は同じく「願生偈」に於いて、他力信仰を表現するに、一心の語と共にまた觀見の語を以つてしてゐる。卽ち、淨土の依報に對しては「觀彼世界相」、「勝過三界道乃至故我願生彼、阿彌陀佛國」と喜び、正報に對しては「觀佛本願力、遇無空過者」「能令速滿足、功德大寶海」と述べてゐる。從つて、この觀の語は一見『觀無量壽經』の觀の如く、淨土の依正二報を詳しく觀察し觀念する觀のやうに考へられ易い。然るに、此の「願生偈」にあつては、毫も『觀經』の如く觀行の次第を說いてゐないのであるから、この觀は寧ろ安心上の意味に解すべきであつて、宗祖はこれを觀知の義に解し、『一念多念文意』には「觀は願力をこゝろにうかべみるとまうす、またしるといふこゝろなり」とし、『銘文』本十右には「觀佛本願力遇無空過者といふは、如來の本願力をみそなはすに、願力を信ずるひとはむなしくこゝにとゞまらすとなり、能令速滿足功德大寶海といふは、能はよしといふ、令はせしむといふ、速はすみやかにとしといふ、よく本願力を信樂するひとは、すみやかにとく功德の大寶海を信者のそのみに滿足せしむるなり」と稱されてゐる。

要するに、天親菩薩は愚鈍の衆生をして解しやすからしめんがために、本願の三心を約して彌陀をたのむところの行者歸命の一心とし、又、それが如來の廣大なる意趣を勝解する心である點から、本願を觀知し信知する心なりと釋したのであつて、この一心の宣布に依つて、我々は他力信仰の普遍性と優越性とを能く知らしめられる。

第二節　五念門の施設

かくの如く、天親は一心歸命の信を勸めたのであるが、その彌陀を信ずる

一心歸命の安心は、自然に行者の身口意の三業の上に起行となつてあらはれるに相違ない。こゝに於いて、天親はこの起行を五念門として示し、解義分に於いては五念門の行を往生の因として「若善男子善女人修五念門行成就畢竟得生安樂國土見彼阿彌陀佛」と說いてゐる。然らば、この五念門の行は何によつて施設したのであらうか。

一心流出の五念門

思ふに、龍樹の『易行品』には、既に禮拜、讃嘆等の名目が出てゐるから、五念門は一應それらの起行に關する名目を適當に組み合せたものとも考へられぬことはない。併し、天親はこれを五念門卽ち五念佛門の意を以つて名づけてゐる所から見て、彌陀に歸命する一心そのものに、かくの如き五念門の行相の流出すべき意味を持つものゝ如く、この名目はさうした內省から生れたものと窺はれる。卽ち、一心歸命の他力信仰は龍樹の所謂「恭敬心」であるから、そこに自ら禮拜門の行を生じ、またそれは所歸の對象たる阿彌陀佛を佛の中の佛と仰ふぐ心であるから、自ら讃嘆門の行を生じ、かくてまた、そこに淨土を願ひ、淨土を歸依處とする意味があるから、作願門と觀察門との行を生じ、更に、それは自己一人が救はれゝばよいといふのではなく、その喜びを他のものに廻らし向けて、諸共に救はれてゆかうといふ大乘菩薩の信念であるから「普共諸衆生往生安樂國」といふ廻向門の行を生ずるのであつて、まことにそれは他力信仰の具體的生活から流出すべき必然の姿なのである。

かくて、天親は總說分に說く所の「歸命」を以つて禮拜門を施設し、「盡十方無礙光如來」を以つて讃嘆門を、「願生安樂國」を以つて作願門を、「觀彼世界相」以下の八十八句を以つて觀察門を、「普共諸衆生往生安樂國」を以つて廻向門を施設し、解義分に於いては右の如く五念行の往生を說いたのである。この中、前の四は自利の行であつて、後の一は利他の行である。

信と行

併し、こゝに注意しなければならないのは、總說分(偈頌)では一心歸命の安心に依つて安樂國に往生すると說き、今解義分(長行)に於いては五念門の行を修して往生すると說くのは、如何に考へるべきであらうか。思ふに、信と行とはものゝ表裡で、內にあるを信と云ひ、それが外に發動した相を行とい

ふのである。されば、一心の信は必然的に五念の行とあらはれるので、信と行との二因が並立してゐるわけではない。或は内なる信を以つて往生すと說き、或は外なる行を以つて往生すと說くのは、信より流出する行なるが故に、何れもひとつの救濟の事實を說明したものに過ぎない。それ故に、信なき行、行なき信は眞實の生命を失うたものと云ふべきである。かくて、一心の信は必ず五念の行を發動せしめるもので、つきつめて云へば、一心の信こそ往生の正因であるけれども、それが外にあらはれた五念の行を以つて、往生の正因と說くことも何等妨げないのである。

五念門は苦難の行

されど、又解義分に於ける五念行の說明を見るに、それは甚だ幽玄高尙なものであつて、少くとも一心の信から發動した他力自然の行とは思はれ難く、從つて愚惡の凡夫の修し得べくもないものであつて、文字にあらはれるまゝに修行せねばならないとすれば、それは到底易行道とは稱し難い。これは如何に考ふべきであらうか。既に述べた如く、五念の行は一心歸命の信より流出すべきものである。然るに、我々の信仰生活にあつて、五念の行は必ずしも充全に發動しない、寧ろ愼しめど愼めど濁惡の生活を具現するに過ぎない。それにも拘らず、天親が一心流出の五念行を極めて幽玄高尙なものとして說示せられたことは、實に一心歸命の信に具足する德をあらはしたものと見なければならない。まことに、佛の本願力を觀知して、一心に無礙光如來に歸命する信念こそ、それは佛願の全功德を領受したものであつて、よしそれが現實の濁れる生活に全現しなくとも、その體德を具するのである。されば、天親は五念門の行相を彌幽玄高尙に說かれたのであつて、却つて五念の行が幽玄高尙であればある程、我々は佛願難思の大悲を歡喜せねばならないのである。かくて、この五念門は衆生にあつては一心等流の行相に相違ないけれども、その本を求むれば、我々愚惡の衆生を救はんが爲に、積功累德せられた佛大悲の行と感佩せられるのであつて、次の曇鸞はこれが釋顯に努めたのである。

五念門行は一心の具德

第三節　五功德門と菩提

往生の因果

上來述べ來つた一心五念は、云ふ迄もなく往生淨土の因である。これらの因には如何なる結果があらはれるであらうか。

五功德門

五功德門とは、實にその結果をあらはしたものであつて、まづ初の禮拜門に依つては、現在直ちに淨土の證りに近づくといふ近門の功德を得、次の讃嘆門に依つては、身はなほ此の世にありながら、淨土の數多い聖衆の數に加へられるといふ大會衆門の功德を得るので、この二つは現世に於いて受ける所の利益であるから「現益」といはれる。又、作願門に依つては、淨土に往生して安樂なる宅に入る宅門の益を得、觀察門に依つては、阿耨菩提の屋に坐する屋門の益を得、更に廻向門に依つては、生死の園林に遊戯して、自在に有緣の衆生を救濟する園林遊戯地門の益を得るので、この三つは淨土に於いて受ける所の利益であるから「當益」と稱せられてゐる。又、前の四つは自利の德であるから入の功德と名づけ、後の一つは利他の德であるから出の功德と名づけてゐる。

現益

當益

五功德と菩提

かくて、一心五念の因に依つて五功德の果を得ると說く所に、天親の淨土教の綱格がある。然るに、解義分の叙述を見ると、五功德門は一心五念に依つて得る所の往生の果とせられると共に、又、これを佛果菩提を得る所の因とし、淨土へ往生した人は更に五念門の行を修して、漸次に五種の功德を成就し、以つて佛果菩提を得るかのやうに說かれてゐる。併し、『大經』の說相に依るも、將又『小經』の說相に依るも、淨土は明かに無爲涅槃の世界であつて、そこに往生するものは、皆同じく「自然虛無之身無極之體」を受けるのであるから、我々五念門の行者は、淨土に往生し更に修行して漸次に五功德を成就し、以つて佛果菩提を得るのではなく、淨土に往生すると共に、直ちに佛果菩提を得るのである。從つて、五功德門といふは、所詮菩提の一果を菩薩の勝進行に寄せて見せたものと窺はれるのである。

大體、五念門の行は凡て一心の信から流出するものであつて、その間に順序次第はないのであるから、それに配當せられる五功德門にも順序次第は

あらう筈なくそれは往生即成佛(菩提)の一果を分けて見せたものに相違ない。かくて、宗祖は右の如く一度はこれを菩提の一果に收め、再び開いて前の二つを現益、後の三つを當益とせられたのである。

往生の因果

要するに、天親の淨土教は往生淨土の因果を明かにした所にその特色が存するので、これに一因一心)一果(菩提)、五因(五念門)一果(菩提)、一因(一心)五果(五功德門)、五因(五念門)五果(五功德門)といふ四種の因果が考へられる。しかも、その中一因一果の法門こそ、天親の所詮とする所で、その他はこれを詳かにするものと見られる。

(正信念佛偈)

天親菩薩造論説
歸命無礙光如來
依修多羅顯眞實
光闡横超大誓願

(念佛正信偈)

天親菩薩作論説
依修多羅顯眞實
光闡横超本弘誓
演暢不可思議願

廣由本願力廻向
爲度群生彰一心
歸入功德大寶海
必獲入大會衆數
得至蓮華藏世界
卽證眞如法性身
遊煩惱林現神通
入生死薗示應化

由本願力廻向故
爲度具縛彰一心
歸入功德大寶海
必獲入大會衆數
得至蓮華藏世界
卽證寂滅平等身
遊煩惱林現神通
入生死薗示應化

一釋迦の教法おほけれど
　煩惱成就のわれらには
二安養淨土の莊嚴は
　究竟せること虛空にして
三本願力にあひぬれば
　天親菩薩はねんごろに
　彌陀の弘誓をすゝめしむ。
　唯佛與佛の知見なり
　廣大にして邊際なし。(ホトリサハナシトナリ)
　むなしくすぐるひとぞなき

功德の寶海みち〳〵て　煩惱の濁水へだてなし。
四如來淨華の聖衆は　正覺のはなより化生して
衆生の願樂ことゞく　すみやかにとく滿足す。
五天人不動の聖衆は　弘誓の智海より生ず
心業の功德淸淨にて　虛空のごとく差別なし。
六天親論主は一心に　無礙光に歸命す
本願力に乘ずれば　報土にいたるとのべたまふ。
七盡十方の無礙光佛　一心に歸命するをこそ
天親論主のみことには　願作佛心とのべたまへ。
八願作佛の心はこれ　度衆生のこゝろなり
度衆生の心はこれ　利他眞實の信心なり。
九信心すなはち一心なり　一心すなはち金剛心
金剛心は菩提心　この心すなはち他力なり。
一〇願土にいたればすみやかに　無上涅槃を證してぞ
すなはち大悲をおこすなり　これを廻向となづけたり。

第三章　曇鸞大師

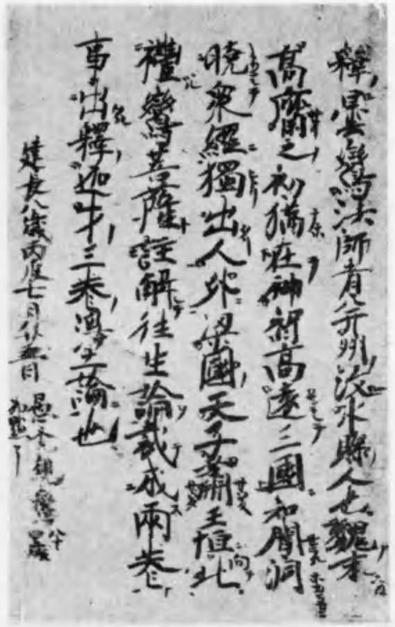
第一節　自力他力の分別

難易二道と自力他力

龍樹に於ける難易二道の判を受けて、更にその奥旨を汲み、こゝに自力他力の判釋をあらはしたものは曇鸞大師である。云く、

「謹案龍樹菩薩十住毘婆娑云、菩薩求阿毗跋致有二種道、一者難行道、二者易行道、難行道者謂於五濁之世於無佛時求阿毗跋致爲難、此難乃有多途、粗言五三以示義意、一者外道相善亂菩薩法、二者聲聞自利障大慈悲、三者無顧惡人破他勝德、四者顚倒善果能壞梵行、五者唯是自力無他力持、如斯等事觸目皆是、譬如陸路步行則苦、易行道者謂但以信佛因緣願生淨土、乘佛願力便得往生彼淸淨土、佛力住持卽入大乘正定之聚、正定卽是阿毗跋致、譬如水路乘船則樂、此無量壽經優婆提舍蓋上衍極致不退風航者也」（『淨土論註』初首）

顧みるに、龍樹は難易の二道を釋するに、これを行體から分別して、六波羅蜜の修行に依つて不退の位に至らんとする難行道は修行そのものが甚だ困難で、且つ長時の努力を要し、又道を誤れば、聲聞辟支佛の如き小乘の小果に墮する恐れがある。然るに、易行道は信方便の念佛に依つて疾く不退の位に入るといふのであるから、前者に比して行そのものが甚だ容易であると說明したのである。併し、この龍樹の說明に依つては、何が難行道であり、又何が易行道であるかは知られるけれども、何故にそれが難行道であり、又易行道であるかは明かになつてゐない。こゝに曇鸞は、龍樹の意を承けて自力他力の別を考へ、以つてその理由を明かにし、所釋の



淨土論註（宗祖御加點本奥書）

『淨土論』こそ、正しくその易行道の粹を顯はした書なることを決定したのである。

行緣による說明

即ち、曇鸞は難易の二道を分別するに、行體よりもその行緣、即ち修行をする環境に注意し、この環境の難を「五濁の世」と「無佛の時」に要約し、更に前者に四難、後者に一難を數へ、これに對して、信佛の因緣を以つて淨土に往生し、以つてさとりを開く易行道には此難なく、甚だ容易にすゝみ得るといつたのである。

自力と他力

併しながら、今一歩すゝんで考へると、行體を難とし行緣を難とするのは、實は有限な自己が有限の自己なることを知らず、自己の分限を忘れて恣に無限の佛果を獲得せんとする自力修行の錯誤にあるのであるから、曇鸞はこれを注意して、難行道は「唯是自力無他力持」と云つたのである。これに對して、易行道はこれと全く趣を異にして、「但以信佛因緣願生淨土乘佛願力便得往生彼淸淨土佛力住持卽入大乘正定之聚」と云ひ、有限の自己を有限の自己と知つて如來の本願力に乘託し、以つてその目的を達するのであるから

易なりとしたので、斯く自力他力を以つて難易の二道を分別した所に、その深刻さが偲ばるべく、こゝに淨土教史上に於ける曇鸞の大なる功績が見られるのである。

第二節　他力教の對機

淨土論の普共諸衆生

曇鸞の信念に依れば、天親の『淨土論』こそ、まことに易行道開顯の明燈である。而して、その『淨土論』には、まづ「願生偈」を「普共諸衆生往生安樂國」なる語で結んである。然らば、こゝに「普共諸衆生」と指示した衆生は、そもく如何なる機類を意味するのであらうか。

こゝに曇鸞は、その諸衆生が智慧勝れ德高い人々を指すのではなく、『淨土論』が實に我々凡夫の救はるべき道を敎へられたものであることに於いて、その中に一切の衆生を含むことを明かにしたのである。即ち、『論註』上卷の終には八番の問答を設けて、此の旨を說いてゐる。

論註八番問答

まづ、最初の五番の問答に於いては、『大經』第十八願文及びその成就文に「唯除五逆誹謗正法」と說ける文と、『觀無量壽經』下々品に「作不善業五逆十惡具諸不善如此愚人……至心令聲不絕具足十念稱南無阿彌陀佛稱佛名故於念々中除八十億劫生死之罪」とある文とを對比して、『大經』には五逆と誹謗正法のものを除き、『觀經』には十惡五逆のものも往生を得ると說くのは、如何なる理由であるかを說明してゐる。即ち、『大經』は五逆と誹謗正法との二重の罪を持つから往生を得ずとし、又『觀經』は十惡五逆の罪のみを說くから往生を得るとしたので、特に謗法罪の恐ろしいことを注意してゐる。しかし、曇鸞の眞意を探るに、謗法のものと雖も廻心すれば淨土の往生を許すものゝ如く、後の善導はこの點を明かにしたのである。

かくの如く、十惡五逆の惡人と雖も、信佛の因緣を以つて凡て救はれ得ることを說いた曇鸞は、更に進んで六番目の問答に於いて、業道論からかくの如き唯知作惡の惡人が、十念々佛に依つて往生を得る理由を明かにしてゐる。思ふに、業道は秤の如く、重きものゝまづ結果を牽くことは、佛敎々理の通則である。然るに、十惡五逆の惡人がたゞ十念の念佛といふ輕い善業に依

三在釋

つて、往生を得るのは何故であらうか。こゝに彼曇鸞は、在心在緣在決定の三在釋なるものを立てゝ、惡人往生の可能を論證してゐる。

まづ、在心とは罪を造る心と念佛する心とを比較するので、一切の罪はすべて虛妄顚倒の見から生じ、これに對して、十念の念佛は實相の法たる如來の本願を喜ぶ心から生ずるから、一は虛一は實であつて、その輕重は到底比較にならぬといふのである。例へば、千歲の闇であつても、光到れば卽ち明朗なるが如く、千歲の闇なればとて、千歲を經なければその闇が破られないわけのものではない。實に、十念々佛は十惡五逆の闇を破る光にも比すべきである。次に、在緣とは罪を造る心と念佛する心の緣を比較するので、一切の罪はすべて虛妄顚倒の果報に緣つて生じ、十念の念佛は眞實淸淨無量功德の名號に緣つて生ずるから、その輕重はまた同一の論ではなく、恰かも滅除藥の鼓を聞けば如何なる毒も除くことを得るが如く、十惡五逆の罪も念佛に依つてその闇を除くを得るのである。次に、在決定とは罪を造る心と念佛する心との心のおき方を比較するので、かの罪を作る心はその心が氣儘で不純であり、十念々佛する心は必至で純粹であるから、また能く重き十念々佛を以つて輕き十惡五逆の罪を除くことを得るといふのである。

この三在釋には深く考へさせられるものがある。

更に、七八の兩問答に於いて、この十念の意味を決定し「經言十念者明業事成辨耳、不必須知頭數也」と云つてゐる。卽ち、十念とは十聲の念佛とか、十邊の憶念とか云ふ限定的意味ではなくて、阿彌陀佛を聞く時、往生の業事成辨して、不退の位に到るを云つたものであるとて、これを第一問答の「信佛因緣皆得往生」にかへしてゐる。

天親の衆生と云へるは唯知作惡の人

かくて、天親が普共諸衆生と云つた衆生は、實に『觀經』下々品に於ける如く、唯知作惡の人を意味することが、明かにされた。

第三節　他利々他の深義

論の速得菩提

天親は『淨土論』の解義分に於いて、五念門の行を往生の因と示し、更に五念行の因に依つて五功德の果を得ることを述べ、これを結んで「菩薩如是修

五門行自利々他速得成就阿耨多羅三藐三菩提と云つたのである。されば、『淨土論』の文は五念行に依つて淨土に往生し、淨土の五果に於いてまた五念行を修し、自利々他成就して速かに菩提を得ると說くが如くである。しかも、『論』の叙述を見れば、五念の行を修して漸次に五功德の果を得るのであり、又、こゝに說かれる五念の行なるものは、煩惱成就の凡夫人たる我々にとつては餘りにも苦難の行であつて、論主の普共諸衆生に含まるべき、我々の到底堪へ得ない所である。それにも拘らず、論主は何故に速得菩提と云つたのであらうか。

この疑問に對して、曇鸞はまづ「論言修五門行以自利々他成就故」と、論文に依つて、五念の行を成就して佛果を成ずる所以を答へ、更に端を改めて次のやうに述べてゐる。

「然覈求其本、阿彌陀如來爲增上緣、他利之與利他談有左右、若自佛而言宜言利他、自衆生而言宜言他利、今將談佛力、是故以利他言之、當知此意也、凡是生彼淨土及彼菩薩人天所起諸行、皆緣阿彌陀如來本願力故、何以言之、若非佛力四十八願便是徒設、今的取三願用證義意、願言設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺、唯除五逆誹謗正法、緣佛願力故十念々佛便得往生、得往生故卽免三界輪轉之事、無輪轉故所以得速一證也、願言設我得佛國中人天不住正定聚必至滅度者不取正覺、緣佛願力故住正定聚、住正定聚故必至滅度、無諸廻伏之難、所以得速二證也、願言設我得佛他方佛土諸菩薩衆來生我國究竟必至一生補處、除其本願自在所化爲衆生故、被弘誓鎧、積累德本、度脫一切、遊諸佛國、修菩薩行、供養十方諸佛如來、開化恒沙無量衆生、使立無上正眞之道、超出常倫諸地之行、現前修習普賢之德、若不爾者不取正覺、緣佛願力超出常倫諸地行、現前修習普賢之德、以超出常倫諸地行故、所以得速三證也、以斯推他力爲增上緣、得不然乎」『論註』下三十五。この釋は、もと『論』に「觀佛本願力遇無空過者、能令速滿足功德大寶海」とあるに注意したものであつて、能令と速滿の意こそ、この解決を產み出した母胎である。

これに依れば、願生行者の修する五念門の行は、實に阿彌陀如來の本願力を本質とするのであつて、このことは論主が「自利利他成就」と示された利他

覈求其本釋

他利々他の深義

の語にその秘鍵を持つのである。一般に利他と他利とは同意語として用ひられてはゐるが、これを嚴密に區別するときは、そこに深義を秘するのである。卽ち、五念行に就いて云へば、第五の廻向門は前四門に兼ねて他を利益する所の行であつて、僅かに自利の喜びを他に與へる程度のものに過ぎないから、これは他利と云はるべきものである。それ故に「自衆生而言宜言」「他利」と云つたので、五念門が願生行者の所修である限りは、自利他利成就と云はるべきである。然るに、今『論』には自利々他と云つてゐる。利他とは、實に自利餘つて他を利する程度のものではなくて、本來他を利するを目的としたものである。されば、自利々他と云つた以上、その廻向門の行は全く衆生のものではなくて、如來の利他行でなければならない。卽ち、我々が他を導くことが出來るのは、如來が我々に代つて廻向の行を修め、それを名號の德として我々に廻向されるから、歸命の一心によく我々が利益他の德を具することが出來、そこに他を利する廻向の行がなし得るのである。されば、論主が自利他利と云はずして自利々他と云つたのは「自佛而言宜言」「利他」きの宗祖の廻向の宗教

如來の行たることを意味するのである。既に、廻向門の行が如來の所修であるとすれば、前四の自利の行も又己が力で修するのでなく、全く佛力增上緣の賜である。かくて、もと衆生の所修所得と考へられた五念行も、翫にその本源を尋ぬれば、實に如來が一切衆生に廻施せんが爲に成就せられた所で、それ故にこそ、論主は自利々他成就と云つて佛力を談じ、衆生往生の因果みな佛の願力より起ることを示されたのである。こゝに於いて、論主が五念の行を煩惱成就の凡夫の修すべからざる幽玄高尙のものに說明せられたことも、それが我々の修すべき行でなく、全く如來がそれを修して我々に廻向せられるものなることに依つて、明らかに領解されるのである。否寧ろ、それが苦難の行であればある程、却つて如來の大悲成就の勞苦を示し、願力不思議の輝きを增すことになるのである。宗祖の他力廻向の法門は、實にこゝに胚胎するので、五念門に就いて約末約本の兩釋を設けられた意趣もこゝに存する。

かくて、次に「凡是生彼淨土及彼菩薩人天所起諸行皆緣阿彌陀如來本願力」

とて、四十八願中第十八第十一・第二十二の三願を的取して、他力速得の義を明かにせられた。即ち、第十八願は「十念々佛便得往生」を誓ひ、第十一願は「住正定聚必至滅度」を誓うて、往生するものゝ必ず滅度に到ることを示し、こゝに往生即成佛の義が明かにせられてゐる。更に、第二十二願は「必至一生補處」を誓うたので、これ浄土に往生し成佛したものが、補處の位に下つて普賢の徳を修めることを誓つたのである。

往還の二廻向

こゝに到つて、我々は往還二廻向の相をはつきりと知ることが出來る。論主は一心五念の因を行者の修むるものの如く示されたが、曇鸞は如來すでにこれを成就して凡夫に與へ給ふ所以を明かにし、その如來の廻向を往相還相の二種に分つて示されたのである。まづ、往相とは浄土に往生する相狀であつて、それは第十八願と第十一願とに依つて證せられるが如く、十念々佛の因に依つて往生即成佛の益を得るのである。又、還相とは穢國に還來して衆生を濟度する相狀であつて、これは第二十二願の證する所である。而して、還相の利益は往相證果の内容を示すものに外ならない。しかも、この往還二種の利益は一名號の上に成就して、これを衆生に廻向し給ふから、衆生は本願名號の謂れを聞信する一念に如來の廻向にあづかり、往還因果行信の益を得べく、宗祖はこの意味を『一念多念文意』[三右]に「廻向は本願の名號をもて十方の衆生にあたへたまふ御のりなり」と云ひ、又『和讃』に「安樂佛國に生ずるは、無上寶珠の名號と、眞實信心ひとつにて、無別道故とときたまふ」「南無阿彌陀佛の廻向の、恩德廣大不思議にて、往相廻向の利益には、還相廻向に廻入せり」と歌はれてゐる。

（念佛正信偈）

曇鸞大師梁蕭王
常向鸞處菩薩禮
三藏流支授浄教
焚燒仙經歸樂邦
天親菩薩論註解

（正信念佛偈）

本師曇鸞梁天子
常向鸞處菩薩禮
三藏流支授浄教
焚燒仙經歸樂邦
天親菩薩論註解

報土因果顯誓願一
往還廻向由二他力一
正定之因唯信心
惑染凡夫信心發
證二知生死卽涅槃一
必至二無量光明土一
諸有衆生皆普化

如來本願顯二稱名一
往還廻向由二本誓一
煩惱成就凡夫人
信心開發卽獲レ忍
證二知生死卽涅槃一
必到二無量光明土一
諸有衆生皆普化

一本師曇鸞和尚は
仙經ながくやきすてゝ
菩提流支のおしへにて
淨土にふかく歸せしめき。

二四論の講說さしおきて
具縛の凡衆をみちびきて
本願他力をときたまひ
涅槃のかどにぞいらしめし。

三世俗の君子幸臨し
十方佛國淨土なり
勅して淨土のゆへをとふ
なにゝよりてか西にある。

四鸞師こたへてのたまはく
いまだ地位にいらざれば（フクイノクラヰニイタラストナリ）
念力ひとしくおよばれず。

五一切道俗もろともに
安樂勸歸のこゝろざし
歸すべきところぞさらになき
鸞師ひとりさだめたり。

六魏の主勅して并州の
やうやくおはりにのぞみては
大巖寺にぞおはしける
汾州にうつりたまひにき。

七魏の天子はたふとみて
おはせしところのその名をば
神鸞とこそ號せしか（ナツケタテマツル）
鸞公巖とぞなづけたる。

八淨業さかりにすゝめつゝ
魏の興和四年に
玄忠寺にぞおはしける
遙山寺にこそうつりしか。

九六十有七ときいたり
そのとき靈瑞不思議にて
淨土の往生とげたまふ
一切道俗歸敬しき。

一〇君子ひとへにおもくして
汾州汾西秦陵の（クニノナナリ、コホリノナナリ、サトノナナリ）
勅宣くだしてたちまちに
勝地に靈廟たてたまふ。（スグレタルトコロ、トムラヒノミハカナリ）

一一天親菩薩のみことをも　鸞師ときのべたまはずば
他力廣大威徳の　心行いかでかさとらまじ。
一二本願圓頓一乘は　逆悪攝すと信知して
煩惱菩提體無二と　すみやかにとくさとらしむ。
一三いつゝの不思議をとくなかに　佛法不思議にしくぞなき
佛法不思議といふことは　彌陀の弘誓になづけたり。
一四彌陀の廻向成就して　往相還相ふたつなり
これらの廻向によりてこそ　心行ともにえしむなれ。
一五往相の廻向ととくことは　彌陀の方便ときいたり
悲願の信行えしむれば　生死すなはち涅槃なり。
一六還相の廻向ととくことは　利他教化の果をえしめ
すなはち諸有に廻入して　普賢の德を修するなり。
一七論主の一心ととけるをば　曇鸞大師のみことには
煩惱成就のわれらが　他力の信とのべたまふ。

一八盡十方の無礙光は　無明のやみをてらしつゝ
一念歡喜するひとを　かならず滅度にいたらしむ。
一九無礙光の利益より　威德廣大の信をえて
かならず煩惱のこほりとけ　すなはち菩提のみづとなる。
二〇罪障功德の體となる　こほりとみづのごとくにて
こほりおほきにみづおほし　さはりおほきに德おほし。
二一名號不思議の海水は　逆謗の屍骸もとゞまらず
衆惡の萬川歸しぬれば（ヨロヅノアクダ、ヨロヅノカハニタトヘタリ）　功德のうしほに一味なり。（ヒトツアヂハヒトナルナリ）
二二盡十方無礙光の　大悲大願の海水に
煩惱の衆流歸しぬれば　智慧のうしほに一味なり。
二三安樂佛國に生ずるは　畢竟成佛の道路にて（ヒロキミチ、ヤウヤハヤミチ）
無上の方便なりければ　諸佛淨土をすゝめけり。
二四諸佛三業莊嚴して　畢竟平等なることは
衆生虛誑の身口意を　治せんがためとのべたまふ。

二五 安樂佛國にいたるには　無上寶珠の名號と
　眞實信心ひとつにて　無別道故とときたまふ。
二六 如來淸淨本願の　無生の生なりければ
　本則三三の品なれど（モトハコヽノシナノシナノシヤウ、ホウトニムマレヌレハ、ヒトリモカハルコトナシトナリ）　一二もかはることぞなき。
二七 無礙光如來の名號と　かの光明智相とは
　無明長夜の闇を破し　衆生の志願をみてたまふ。
二八 不如實修行といへることと（オシヘノコトク、ナラストイフコトロナリ）　鸞師釋してのたまはく
　一者信心あつからず　若存若亡するゆへに。（アルトキハサルトモマタ、アルトキハカナワマシトオモフナリ）
二九 二者信心一ならず　決定なきゆへなれば
　三者信心相續せず（アヒツヅカス）　餘念間故とのべたまふ。（アシヘルカコニ、シナ、トイフナリ）
三〇 三信展轉相成す（アヒ、ヤウスルナリ）　行者こゝろをとゞむべし
　信心あつからざるゆへに　決定の信なかりけり。
三一 決定の信なきゆへに　念相續せざるゆへ
　念相續せざるゆへ　決定の信をえざるなり。
三二 決定の信をえざるゆへ　信心不淳とのべたまふ（シンシムアツカラストイフナリ）
　如實修行相應は（オシヘノコトク、シスルコヽロナリ）　信心ひとつにさだめたり。
三三 萬行諸善の小路より　本願一實の大道に
　歸入しぬれば涅槃の　さとりはすなはちひらくなり。
三四 本師曇鸞大師をば　梁の天子蕭王は
　おはせしかたにつねにむき　鸞菩薩とぞ禮しける。

第四章　道綽禪師

第一節　時機の反省

道綽禪師と末法思想

教は常に時と機に相應することに依つてのみ弘まるものである。されば、龍樹は既に早く易行道を開出して、傳弱怯劣の機に應じ、更に、天親・曇鸞は共に時機を反省することに依つて、彌陀の教法を弘宣せられたのである。

特に、道綽禪師はその出世の時が恰かも末法の始に相當した爲、深刻に時

機を反省し、痛切な自己反省から教法を選ぶべきことを注意せられた。これ道綽の功蹟の最大なるものであつて、次に述べる聖淨二門の教判もこゝに出發するのである。云く。

「若教赴時機易修易悟若機教時乖難修難入……計今時衆生卽當佛去世後第四五百年正是懺悔修福應稱佛名號時者」

五箇の五百年

こゝに、時機とは『大集月藏經』の五箇の五百年を云ふので、釋尊入滅後第一の五百年は智慧を研くことに依つて佛教が堅固に維持せられ、第二の五百年には智慧の者は少くなるが禪定を修するものがあつて、佛教は堅固なることを得、第三の五百年には智慧や禪定を修するものはないが、教を多聞讀誦することに依つて堅固なるを得、第四の五百年になると、教を多聞讀誦するものはなくなるが、塔寺を造立し、その他の福德を修し、自らの罪を懺悔する者があつて、尙佛教が堅固に維持せられ、第五の五百年には遂に教法はかくれてしまつて、教徒は互に爭ふ樣になるが、しかも尙善法があつて堅固なることを得るといふのである。

正像末の三時

また、同經に依ると、釋尊入滅の後五百年を正法の時代、その後千年間を像法の時代、その後一萬年間を末法の時代とするのである。而して、正法の時代には教もあり、この教を如實に行ずるものもあり、從つて行に依つて證を得るものもあるが、次の像法時代になると、教とそれを行ずるものはあつても、遂に證を得るものはなくなる。更に末法の時代に到れば、教のみはあるけれども、それを行ずるものも、ましてや證るものも一人もないといふのである。これを先の五箇の五百年說に配當すると、第一の五百年は正法、第二第三の五百年は像法、第四第五の五百年は末法の時代に當るのである。

末法意識の痛感

かくて、彼は深くこの末法意識を省みて、强く濁世の相を痛み、こゝに佛教を聖淨の二門に分ち、正像末の三時に拘りなき易行の要法を求めたのである。かくの如き立場から、彼道綽は三經の中、特に『觀無量壽經』に深い意趣を認め、曇鸞の十念々佛を『觀經』下々品の十聲稱佛に合せしめて、如來本願の救濟を高調したのである。されば、龍樹・天親・曇鸞の三師が特に『大經』を中心として、信の方面から本願の念佛を說いたのに對し、道綽以後善導・源信・

觀經中心の弘化

源空の四師は主に『觀經』を中心として、稱名行の側から念佛の教法を說いたのである。かくて、時機の反省から『觀經』の深旨をあらはした處に、道綽禪師の淨土教の特色があると云ふべきである。

第二節　難易二道と聖淨二門

聖道淨土の二門判

道綽の淨土教に於ける最大の功績は聖淨二門の教判を示した點であつて、元祖以來の淨土教は專らこの判教に依據したのである。既に述べた如く、龍樹は行體の難易に就いて佛教を難行道と易行道とに分ち、曇鸞はこれを承けて行緣を顧みつゝ、自力他力といふを基準として行の難易を明かにせられた。こゝに、道綽は龍樹の難易二道を承けて、佛教を聖淨の二門に分ち、聖道門の難證を決して易往の淨土門を勸めたのである。

聖淨二門の意味

然らば、道綽は何故に龍樹の難易二道よりすゝんで、聖淨二門の教判を設けたのであらうか。この點に就いて、道綽は何等の說明を加へてはゐないが、恐らくは聖道淨土の名目に內含される意味から、その深意を汲むべきものであらう。卽ち、聖道門とは聖は大聖の意味で諸佛のことであり、道は佛果に到る因道を意味し、漸次に煩惱を斷じて凡夫より佛果に進む修行を指すのである。されば、聖道門は此土入聖得果と稱して、此土にあつて修行をなし、大聖卽ち佛の證果に入るべき因道を云ふのである。これ、曇鸞に依つて自力の道と敎へられたものである。次に、淨土門とは往生淨土の敎門といふ意味で、煩惱を斷ぜず淨土に往生して、直ちに佛果に到らんとする道である。されば、他土得證或は彼土往生成佛と稱して、未來彼の淨土に往生して佛と成る敎へで、これは曇鸞に依つて他力の道と敎へられたものである。

聖道難證の理由

從つて、聖道門はまさに難行に堪え得る聖者所修の道であり、淨土門は煩惱具足の凡夫相應の道なのである。この故に、道綽は『安樂集』上卷の終りに

「其聖道一種今時難證、一由去大聖遙遠、二由理深解微、是故大集月藏經云、我末法時中億々衆生起行修道未有一人得者」

と聖道難證の所以を明かにし、更に語を次いで、

「當今末法現是五濁惡世、唯有淨土一門可通入路、是故大經云、若有衆生縱令

一生造悪、臨命終時十念相續稱我名字、若不生者不取正覺」

と、淨土の一門のみ我々衆生の救はれる唯一道なることを開示せられてゐる。即ち、聖道の證り難きことに二由を擧げて『大集月藏經』の證文を出し、また淨土門の入り易きことを示すに『大經』の明證を以つてし、こゝに龍樹の難易二道と曇鸞の自力他力との上に、聖者所修の道と凡夫相應の道を明かならしめんが爲、この聖淨二門の教判を設けられたのである。

末法濁世の内感

更に、龍樹の難易二道にあつては、難行道は丈夫士幹の道であつて苦難ではあるけれども、證り難しとは斷言せられなかつた。然るに、道綽は「起行修道未有一人得者」なる『大集月藏經』の文を引いて、全く聖者の道の閉ざゝれてゐることを斷じてゐられる。これ、道綽の末法意識による内感が深く人間性の眞實性に觸れたからであつて、龍樹曇鸞等の像法の時代には未だ自力の修行者もあつたであらうけれど、道綽の頃に到れば眞實の修行者は全く跡を絶つて、泌々と末法濁惡の委が痛感せられたのでもあらう。されば、聖道門の證し難き理由の一には「大聖を去ること遙遠なるに由る」と云つて、佛陀の出世におくれてまのあたりその教へを受け得ざることを悲しみ、又、二には「理深く解微なるに由る」と云つて、その教ふる道理の甚だ深く、しかもこれを證らんとする凡夫の知解は極めて微力であつて、到底愚惡の我々の及ぶ所でないことを痛まれたのである。然るに「唯有淨土一門可通入路」で、淨土門のみが五濁惡世の時に當つて一生造惡のものも救はれる教へなるが故に、この一門のみ末法相應の要法なることを喜ばれたのである。實に、道綽は時の利不利より更に機の堪不堪を省みて、深く教法の眞實性を洞察し、末法濁世の衆生の救はるべき道を明かにせられたのであつて、こゝに道綽が特に聖淨二門の判を施された理由がある。

かくて、我々は佛陀の出世に後るること二千五百年、しかも心は煩惱に滿ち溢れ、行は罪惡に包まれてゐる。これを思ふ時、たゞ自己罪濁の委を内省して、ひたすらに淨土易行の法に歸入しなければならぬのである。

（正信念佛偈）

道綽決二聖道難一證
唯明二淨土可一通入一
萬善自力貶二勤修一
圓滿德號勸二專稱一
三不三信誨慇懃
像末法滅同悲引
一生造レ惡値二弘誓一
至二安養界一證二妙果一

（念佛正信偈）

道綽決二聖道難一證
唯明二淨土可一通入一
萬善自力貶二勤修一
圓滿德號勸二專稱一
三不三信誨慇懃
像末法滅同悲引
一生造レ惡遇二弘誓一
至二安養界一證二妙果一

一本師道綽禪師は
　唯有淨土一門を
二本師道綽大師は
　本願他力をたのみつゝ

聖道萬行さしおきて
　通入すべきみちととく。
涅槃の廣業さしおきて
　五濁の群生すゝめしむ。

三末法五濁の衆生は
　ひとりも證をえじとこそ
四鸞師のおしへをうけつたへ
　在此起心立行は（シヤハセカイニテホツイシハチオコシ・キヤウヲタツルハ、）
五濁世の起惡造罪は（ミナシリキナリトシルベシ）（アツテオコシ、ヅミヲツクルコトノ、オホキコトヲイフ）
　諸佛これらをあはれみて
六一形惡をつくれども
　つねに念佛せしむれば
七縱令一生造惡の（タトヒ一コウタツツルモノナリトモ、タノミカヒヲタノミマヒラヤテ、）
　稱我名字と願じつゝ（ワヽナヲトナヘヨト、クワンジタマヘリ）

聖道の修行せしむとも
　教主世尊はときたまへ。
綽和尚はもろともに
　此是自力とさだめたり。（コレハコレシリキナリトイフ）
暴風驟雨にことならず
　すゝめて淨土に歸せしめり。
專精にこゝろをかけしめて（モハラコノミルトイフ）
　諸障自然にのぞこりぬ。
衆生引接のためにとて
　若不生者とちかひたり。（モシムマレスハ、ホトケニナラシトチカヒタマヘルナリ）

第五章　善導大師

第一節　凡人の宗教

古今楷定の大業

善導一代の功績は『觀經』に對する古今の謬解を楷定して、淨土の三經を所依とする彌陀教を正しい立場に置いた點にある。されば、彼の『觀經』の解釋こそは眞實に佛意を開顯したものとして、淨土教々義の中心となるものである。然らば「善導獨明佛正意」の要點は如何なる所にあるのであらうか。

觀經所對の衆生

まづ『觀經』所說の對象となる衆生が如何なる衆生であるかを見定めることは、この經を理解するに就いての根本問題である。これに就いて、淨影・

諸師の說

天台・嘉祥等の諸師は『觀經』を以つて凡夫の爲の教へにあらず、聖者の爲の教へなりとし、從つて、釋尊がこの經を說き給うた對手の韋提希夫人は實の凡夫女人ではなく、菩薩の化身であると主張した。これに對し、善導は深く經意を探つて、既に、釋尊が同經の序分に「汝是凡夫心想羸劣」と示された如く、韋

提希は決して聖者でなく、眞實の凡夫實業の女人であることを明かにせられた。例へば、『序分義』[三十左]には「爲斷此疑故言如是凡夫」と云ひ、『般舟讃』には「韋提卽是女人相貪瞋具足凡夫位」と云つてゐるが如きはこの意味である。更に、散善九品の機類を分けるについて、諸師は上輩三品は大乘の聖者、中輩三品は小乘の聖者、下輩三品は大乘始學の凡夫が墮落したものと定め、この經をかくの如き聖者の爲に說いた教へとしてゐる。然るに、善導はこれに對して、一に道理を以つて、二に經文に就いて、三に十個の證文をあげて、九品唯凡の義を證明してゐる。

善導大師肖像

九品唯凡の證明

まづ、道理とはこの經の對機がかくの如き大小の聖者であるならば、今更に韋提の請ひに依つて安樂國に生ぜんと願ふ必要がない。寧ろ苦惱の衆

生であればこそ、佛の大悲はひとへに常沒の衆生を憐念して、勸めて淨土に歸せしめ給ふのである(一)。このことは經の文勢に於いて知ることを得べく(二)、又、經文中に屢々凡夫衆生の爲にとあつて、明かな證文を有するのである(三)。しかも、このことは散善九品の機ばかりでなく定善の機にも通ずるから、彼はこれを結んで「上來雖有十句不同證明如來說此十六觀法但爲常沒衆生不于大小聖也」(『玄義分』十五)と云つたのである。

九品は機の差別

かくて、善導は定善散善何れにも大小二乘の敎へが說かれてゐるけれども、それは愚惡の衆生が夫々の敎へに遇うた相を說いたものとして、『玄義分』(十三)に次の如く云つてゐる。云く。

「又看此觀經定善及三輩上下文意、總是佛去世後五濁凡夫但以遇緣有異致令九品差別、何者上品三人是遇大凡夫、中品三人是遇小凡夫、下品三人是遇惡凡夫」

卽ち、上中下の三輩を以つて遇大遇小遇惡の凡夫なりと定め、緣あつて大乘敎に遇つたから大乘敎を修め、又、惡緣に遇つたから惡逆の生活を續けてゐるが、若しその緣を逆にすれば自ら逆の相を現ずるとて、衆生の本性は凡て貪瞋の凡夫であると主張してゐる。かくて、凡てが愚惡の凡夫であるならば、まさにその本性を自覺して速かに淨土の敎へに歸せねばならぬと、『觀經』の根本的立場を定めたのである。

第二節　眞報土の開顯

凡夫所生の土

『觀經』所對の衆生が濁惡邪見の衆生であるとするならば、かくの如き衆生の往生する淨土は如何なるものであらうか。この問題に就いての善導の解明は、實に古今獨步のものである。卽ち、諸師に依ると、淨土を高く報土と判ずるものは凡夫の往生を許さず、又、凡夫の往生を許すものは淨土を低く應土と判ずるのである。然るに、善導は煩惱具足の凡夫がそのまゝ高妙の報土に往生する凡夫入報の義を明かにしたのであつて、實に淨土敎を佛敎の最高峰に到らしめたのは、この善導の功績に依ると云つても過言ではない。

眞實報土の開顯

彼は『玄義分』に第六「經論和會門」に「問曰彌陀淨國爲當是報是化也、答曰是報非化」と斷じて、そこに三個の明證を出してゐる。その一は『大乘同性經』に「西方安樂阿彌陀佛是報佛報土」とある文であり、第二は『大經』に依つて、四十八願に酬報した佛が阿彌陀佛であるから、從つて阿彌陀佛は報佛であり、その佛土は報土であるといふ。その三は『觀經』上三品に出づる所の行者が命終る時、阿彌陀佛が化佛と與に行者を來迎するといふ文で、化佛と與にとある以上報身の彌陀が化佛を兼ねることで、それは同時に彌陀が報身でなければならぬことを逆證するといふのである。かくて、『觀經』に於いて凡夫の往生する淨土は實にかくの如き報佛土であることが證明せられたのである。

凡夫入報の理由

然らば、かくの如き報法高妙の淨土へ、如何にして垢障の凡夫が往生し得るのであらうか。別の言葉で云へば、有限者が無限者となる契機は何處に存するのであらうか。これに就いて善導は『玄義分』に

「問曰、彼佛及土既言報者、報法高妙小聖難階、垢障凡夫如何得入。答曰、若論衆生垢障實難欣趣、正由託佛願以作強緣、致使五乘齊入」

と論じてゐる。まことに、凡夫の垢障をのみ論ずるならば、眞實報土に往生するなどは、全く思ひもよらぬことである。凡夫は有限なるものであつて、有限なるものを如何に延長しても無限にはならないからである。然るに、こゝに凡夫を報土に入らしむるものに如來の本願がある。即ち、如來は

如來の本願

衆生救濟の本願に於いて無限者となり、その無限者の生命を有限者の凡夫に與へて、そこに有限者に無限者の生命を持たしめ、以つて我々凡夫を淨土に往生せしめて、無限者の生命を全現せしめ給ふのである。かくて、有限者たる我々凡夫は如來の本願に基いて、無限者となることが出來るのである。それ故にこそ、如來の本願を說くことは三經の本質であり、龍樹以來盛んに强調せられた所である。されば、垢障の凡夫はたゞ如來成就の無限の生命に依つて、自己の無限性を得るのである。この無限の生命とは卽ち如來の名號であつて、その名號を信受する時、我々は有限のまゝに無限の生命を得るのである。この信仰の事實を善導は光明名號を以つて說明してゐる。

即ち『往生禮讃』左四に

光明名號の因緣

「然彌陀世尊本發深重誓願以光明名號攝化十方但使信心求念上盡一形下至十聲一聲等以佛願力易得往生」

と云つてゐる。かくて、彌陀は光明と名號とを以つて十方の衆生を攝化し給ひ、衆生の胸に信心を起し報土往生を求めしめ給ふのであつて、如來の光明に育まれて名號のいはれを聞く時、我々は自然に無限の生命を得るのである。こゝに、我々は如來の本願に依つて明信佛智の大光明海に浮ぶことが出來る。宗祖が『正信偈』に「光明名號顯因緣開入本願大智海」と仰せられたのも、こゝを云はれたもので、かくて善導はよく別意の弘願を顯彰したのである。

第三節　往生行の批判

觀經に於ける往生行

『觀經』が凡人の宗教を明したものであることは、善導の特に注意した點である。然るに、『觀經』に說かれる往生行は定散二善が主となつてゐる。

往生行の批判

何故に、如何なる凡人にも堪え得る易行の念佛を最初から說かれなかつたのであらうか。

これに就いては、既に『觀經』に於いて述べた如く、釋迦は定散の要門を說いて定散の衆生を敎養し、彌陀は弘願の念佛を示してその歸する所を知らしめんとしたのである。されば、流通に於いては弘願の念佛を阿難に付屬して、遂にその本意が別意の弘願に在る旨を明かにしたのであつた。

かくて、『觀經』には釋迦敎要門と彌陀敎弘願とが說かれたのであつて、そこに示される淨土往生の行は單に念佛の一法のみではなく、そこには種々の往生行が說かれてゐるのである。從つて、それらの行のうち、どれが正しく往生淨土の正行であるかは明かでない。それ故に、要弘二門の相對から弘願の念佛を顯彰せるが如く、行の方面から弘願の念佛を開顯せんとするのが往生行の批判である。卽ち、善導は行に正行と雜行とを分ち、更にまた正行の中に於いて助正を分別し、以つて行者の適歸する所を知らしめ給うたのである。『散善義』八右に彼は次の如く云つてゐる。

「然行有二種一、一者正行、二者雜行、言正行者專依往生經行行者是名正行、何者是也、一心專讀誦此觀經彌陀經無量壽經等、一心專注思想觀察憶念彼國二報莊嚴、若禮卽一心專禮彼佛、若口稱卽一心專讚嘆供養、是名爲正、又就此正中復有二種、一者一心專念彌陀名號行住坐臥不問時節久近、念々不捨者是名正定之業、順彼佛願故、若依禮誦等卽名爲助業、除此正助二行已外自餘諸善悉名雜行、若修前正助二行心常親近憶念不斷名爲無間也、若行後雜行卽心常間斷雖可廻向得生衆名疎雜之行也」

正雜二行

五正行

かくの如く、彼は行に正雜の二種を分ち、往生の正行として五種を擧げた。卽ち、一は淨土の三經を讀誦する讀誦正行、二は心に淨土の莊嚴功德を想ひ浮べる觀察正行、三は身に阿彌陀佛を禮拜する禮拜正行、四は口に彌陀の名號を稱へる稱名正行、五は阿彌陀佛の功德を讚めたゝへ、又これを種々に供養する讚嘆供養正行であつて、これを五正行と名づけるのである。而して、これ等の行は何れも「專依往生經行行者」であるから、總じては三經別しては『觀經』を宗とする行である。されば、これ等の正行は特に淨土往生に局る行であつて、そこに正行と云はれる所以がある

雜行

次に、雜行とは淨土往生の行ならざるもので、それ等の諸善を積み、それに依つて淨土に往生せんとするものを雜行往生人といはれる。卽ち、それ等の諸善は淨土へ往生するに疎遠なる行であるから雜行と呼ばれ(雜は疎雜の義)、又、それは十方諸佛の淨土の因行ともなり、或は人天三乘の因行にも通ずるから雜行と呼ばれ(雜は雜通の義)、更に、そこには諸善萬行、雜多の行が攝め含まれてゐるから、雜行と名づけるのである。(雜は雜攝の義)。

正定業

かくの如く善導は行に正雜を分ち、更にその正行を正定業と助業とに分つた。卽ち五正行の中、第四の稱名正行を以つて往生の正定業とし、前三後一の四行を以つて助業としたのである。これ、如來の本願に於いて唯稱名の一行が正しく淨土往生の業と定められてゐるが爲であつて、前三後一のそれは所詮傍にすべき助業と解されるのである。

善導はかくの如く所修の行に就いて正雜二行、正助二業の分別をなし、更に能修の行相に就いて專修雜修の分別を試み、正行を修するものを以つて

専修の行者とし、雜行を修するものを以つて雜修の行者としたのである。併し、このことは更に仔細な觀察を要するのであつて、もと專雜二修は至心と不至心の別であるから、雜行を行ずるものが雜修であるのは勿論、たとひ正行を修するものでも、助正を分別せずしてひとしなみにこれを修するものや、又念佛を以つて現世祈禱に供するものゝ如きは、また助正兼行の雜修、專名祈現の雜修と貶しめられるのである。

第四節　淨土教に對する批難とその解答

觀經の經說

『觀經』の下々品に、一生造惡の凡夫が臨終に十聲の念佛を稱へ、そして淨土に往生してゐることが說かれてゐる。さきに、道綽はこれを以つて如來の本願を解し、所謂稱名本願說の端を開いたのであるが、これに對しては、夙に通論家の學者から鋭い批判が浴せられてゐた。

別時意說

その批難といふのは、下々品に說く所の十聲稱佛の往生には、願のみあつて行がないから、別時意の方便說であるといふのである。凡そ、何事を成就するにも願と行とが必要であつて、何れの一を欠いても物事は成就しないのである。然るに、下々品の行者を見ると、そこには悲痛な淨土往生の願心は見られるけれども、その願を可能ならしめる所の行業がない。或者は、十聲の稱名を以つてその行に擬するかも知れないけれども、それは行と稱せらるべき程のものでなく、云はゞ苦しまぎれの悲鳴に過ぎぬと考へられる。されば、經に淨土へ往生したやうに說いたのは行者の心を勵まさんが爲に、實際はこれを緣として遠い未來に淨土へ往生するのを、宛かもすぐ次生に往生するかの如く說いたのであつて、所謂「別時意趣」の方便說と見るべきだと言つたのである。この批判は可なりにひどく當時の敎界を動かした。こゝに於いて、善導は『玄義分』[十七左]に別時意會通の一章を設け、次のやうにこれに答へた。

「今此觀經中十聲稱佛、卽有十願十行具足、云何具足、言南無者卽是歸命、亦是發願廻向之義、言阿彌陀佛者卽是其行、以斯義故必得往生」

こゝに注意すべきことは、通論家の批難に對して十聲稱佛に願行具足す

六字釋

ることを答へるに當り、願行具足の所以を稱名の稱に於いてせず、名に於いてしたといふことである。卽ち、我々の口に發動する所の稱名そのものに就いて、直ちにこれに答へず、稱名の本質に還つて、所稱の名號に願行具足することを論證し、それ故にこそ名號を信じ稱へる時必ず願行具足して往生を得ると説明したことは、實に彼の卓見であつた。

然らば、名號に如何に願行が具足するのであるか、これを明かにしたのが右に引用した所の有名な彼の六字釋である。まづ、南無といふは漢語に譯して歸命と云ひ、法に就いて云へば歸せよとの命令であり、機に就いて云へばその命令に歸することである。而して、南無には亦傍らに發願廻向の義がある。發願廻向とは、法に約して云へば、如來已に發願して衆生の行を廻施したまふの心であり、機に約して云へば、安樂淨土に生れむと願ふ心である。次に、阿彌陀佛といふのはこれを人(佛體)とするか法(名號)とするかに異論があるけれども、既に佛體は超經驗的な實在であつて、直接に我々の信仰對象とはならないから、この佛體を以つて衆生往生の行とすることは出來ない。されば、阿彌陀佛といふは本願の名號であつて、これを以つて衆生往生の行とするを「阿彌陀佛卽是其行」といふのである。そこで、宗祖はこれを本願(名號)の法に約して、行卷に「言卽是其行者卽選擇本願是也」と釋してゐられる。

されば、南無阿彌陀佛の名號は法に約して云へば、如來の大願と大行とを具足する無限の生命であつて、それ故に歸せよと命じ、またこれを機に約して云へば、かゝる無限の生命に歸して淨土を願生する姿に外ならず、從つて、その名號の謂れを聞いて信じ、これを稱へる他力の稱名には、明かに願行具足の義があるのである。しかも、それは如來の大願大行を具するが故に、十惡五逆の罪人も能く往生を遂げるのであつて、『觀經』の下々品こそは、まさに往生淨土の教への極致をあらはすきはどい場面である。猶、この善導の六字釋は宗祖を經、蓮師に到つてその敎化の樞軸をなしたものであるから、それに就いては特別の研究を要するのである。

第五節　三心釋の要義

大經の三信　小經の一心　觀經の三心

然らば、正定業の念佛を信ずる他力信心の信相は如何なるものであらうか。既に、『大經』の第十八願には「至心信樂欲生我國」の三信を誓ひ、これを成就文には「聞其名號信心歡喜乃至一念」と示し、又『小經』には「一心不亂」と說き給うたけれども、未だその信相を示すものとして充分ではない。また七祖にあつても龍樹・天親は一心を以つて、曇鸞道綽は三不三信の釋に依つて、その信相を明かにせられたが、これとても十分と云ふわけにはゆかない。こゝに善導は『觀經』上々品の初に「若有衆生願生彼國者、發三種心、卽便往生、何等爲三、一者至誠心、二者深心、三者廻向發願心、具三心者必生彼國」とある三心に就いて詳細なる解說を施し、他力信仰の信相を最も鮮かに畫き出したのである。

この三心は『觀經』に於ける畫龍點睛とも稱すべき要義であつて、『觀經』全體を貫くものであり、これを善導の要弘二門に對照すれば、こゝに要門の三心から弘願の三心に通入せしめんとする用意が窺はれるのである。

至誠心釋

まづ、至誠心とは眞實心で身口意に修する所の解行はすべて眞實であれ、雜毒の善や虛假の行を以つてしては、淨土に生ずることは出來ないといふのである。併し、我々の內生活を顧る時、果してかくの如き眞實心があるであらうか。我執の强い我々は常に眞實心のあることを信じ、眞實の生活を努めんとするのであるが、實際に眞實ならむと努めれば努める程、却つて虛假雜毒の自己に氣付かざるを得ない。それ故に、善導は「我等愚痴身」と內省し、かくの如き眞實心が却つて我々のものではなく、如何に努めても眞實心になりきれない衆生のために、如來が菩薩の行を行じ給うた時、一念一刹那も三業に修する所眞實ならざることなく、淸淨ならざることなく、その如來の作し給うた眞實心を衆生に須ひよと勸められたものに違ひないと、解釋せられた。かくて、定散要門の行者は自己の雜善をたのみ、虛假の定散諸行を修して、淨土に往生せんと願ふから自利(自力)眞實であり、弘願の行者はひたすら彌陀の利他大悲に乘託するから利他(他力)眞實であるといふのも、よ

く領解せられる。されば、外現賢善の文も「外に賢善精進の相を現じて內に虛假を懷くことを得ざれ」ではなく、「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、內に虛假を懷けばなり」の內省に裏付けられざるを得ないのである。ここに、虛假雜毒の行では淨土に往生することを得ず、たゞ如來の眞實をそのまゝ惠まれるより外に、我々の眞實はあり得ないといふのが、この至誠心釋の大意である。

次に、深心を釋して彼は次の如く述べてゐる。

「言深心者卽是深信之心也、亦有二種、一者決定深信自身現是罪惡生死凡夫、曠劫已來常沒常流轉無有出離之緣、二者決定深信彼阿彌陀佛四十八願攝受衆生、無疑無慮乘彼願力定得往生」

古來、聖道の諸師は『觀經』を聖者の爲の經としたから、深心も己が心を深めることゝ解したが、善導は『觀經』を以つて凡夫女人の經としたから、此の深心を深く信ずる心としたのである。而してこの深信に機法二種あることを示し、他力信仰の信相を明かにしたことは、實に眞宗信仰の眼を開いたものとして、特に注意しなければならない。卽ち、自己の罪惡生死無有出離之緣の凡夫たることを深信する機の深信は、我々の虛假雜毒の眞實にては往生を得ない自利眞實に對應し、たゞ如來の願力に乘じて往生を得ると深信する法の深信は、たゞ他力眞實に依つて救はれる利他眞實に照應するものである。まことに、天親の所謂一心歸命の一心には、自力は間に合はぬといふ機の深信と、かゝる衆生を助け給ふは彌陀一佛と信ずる法の深信とが具はるのであつて、機法二種の深信は實に一心の二面をあらはしたものと知られるのである。されば、機の深信は單なる罪惡觀の域に止まるものではなくて、それは自己の救濟に就いて自力の全く無功なるを信ずるのであるから、かくの如き力なき衆生の爲に救ひの法を成就せられた選擇本願の內容にその根源を見出しうべく、本願名號の謂れを聞信する所に自ら機法二種の深信を具するのであつて、これ古來二種一具の信心と稱せられる所である。されば、二種深信は他力信心の二面として、自力を捨てた時が他力に歸した時であり、他力に歸した時が自力を捨てた時なので、こゝに他力信

仰の特殊性が知られるのである。

更に、廻向發願心にも要弘二門の別が見出される。即ち、要門の廻願心は自利眞實であつて、自ら修する所の善根を淨土にふりむけて淨土に往生せんとするものであり、弘願の回願心は利他眞實であつて、如來の廻向發願を須ひて淨土に往生せんとするものである。しかも、この場合、弘願の廻願心は必得往生の想から淨土を願生するが故に、善導は「作得生想」と註し、又「此心深信由若金剛不爲一切異見異學別解別行人等之所動亂破壞」と告白してゐる。

廻向發願心釋

善導はかく『觀經』の三心を解して、終に有名な二河白道の喩を設けてゐる。その大要を云へば、こゝに一人の旅人(求道者)がゐる。彼は貪欲の水の河に漂はされ、瞋恚の火の河に燒かれて、往生成佛の旅の目的を達することが出來ず、右往左往して遂に得る所がない。こゝに於いて、「我今廻亦死、住亦死、去亦死」と自らの行き詰りを思念する時、たま〳〵東岸より「仁者但決定尋此道行必無死難若住卽死」といふ釋迦の發遣を聞き、又同時に西の岸より「汝一心正念直來、我能護汝、衆不畏墮於水火之難」といふ彌陀招喚の聲を聞き、こゝに決定して本願の白道を進んでゆく、そして、遂に彼岸の淨土に往生するといふのである。この譬喩に於ける旅人は直接には善導自身であるけれども、また、それは『觀經』の韋提希を指すものとも見られ得べく、彼女の見佛得忍の信境を自らにひきあてゝ、奇しくも意味深くこれを喩說したのである。又、旅人が念々に遺るゝことなく願力の道を進み行くのは、三心の行者の佛を念じてゆく姿でもある。

猶、三心釋の終りに「三心既具、無行不成、願行既成、若不生者、無有此處也」とあるのは信の絕對性を結んだ言葉であると共に、遙かに『玄義分』六字釋に於ける願行具足の義に呼應せしめて、意味深く味はしめられる。

(正信念佛偈)

善導獨明佛正意
矜哀定散與逆惡

(念佛正信偈)

善導獨明佛正意
深籍本願興眞宗

光明名號顯二因緣一
開二入本願大智海一
行者正受二金剛心一
慶喜一念相應後
與二韋提等獲二三忍一
卽證二法性之常樂一

一大心海より化してこそ
末代濁世のためにとて
二世世に善導いでたまひ
功德藏をひらきてぞ
三彌陀の名願によらざれば
いつゝのさはりはなれねば
四釋迦は要門ひらきつゝ
矜二哀定散與一逆惡一
光明名號示二因緣一
入二涅槃門一値二眞心一
必獲二於信喜悟忍一
得二難思議往生一人
卽證二法性之常樂一

善導和尙とおはしけれ
十方諸佛に證をこふ。
法照少康としめしつゝ
諸佛の本意とげたまふ。
百千萬劫すぐれども
女身をいかでか轉ずべき。
定散諸機をこしらへて

正雜二行方便し
五助正ならべて修するをば
一心をえざるひとなれば
六佛號むねと修すれども
これも雜修となづけてぞ
七こゝろはひとつにあらねども
淨土の行にあらぬをば
八善導大師證をこひ
貪瞋二河の譬喩(タトヘナリ)をとき
九經道滅盡ときいたり
弘願眞宗にあひぬれば
一〇佛法力の不思議には
彌陀の本弘誓願を
一一願力成就の報土には
ひとへに專修をすゝめしむ。
すなはち雜修となづけたり
佛恩報するこゝろなし。
現世をいのる行者をば
千中無一ときらはるゝ。
雜行雜修これにたり
ひとへに雜行となづけたり。
定散二心をひるがへし
弘願の信心守護(マモリマモル)せしむ。
如來出世の本意なる
凡夫念じてさとるなり。
諸邪業繫さはらねば
增上緣となづけたり。
自力の心行いたらねば

大小聖人みなながら
一二煩悩具足と信知して
すなはち穢身すてはてゝ
一三釋迦彌陀は慈悲の父母（シヤカハチヂ・ナリ・ミタハハ・ナリト・タトヘタマヘリ）
われらが無上の信心を
一四眞心徹到するひとは
三品の懺悔するひとゝ
一五五濁惡世のわれらこそ
ながく生死をすてはてゝ
一六金剛堅固の信心の
彌陀の心光攝護して
一七眞實信心えざるをば
一心かけたるひとはみな
一八利他の信樂うるひとは

如來の弘誓に乘ずなり。
本願力に乘ずれば
法性常樂證せしむ。
種種に善巧方便し
發起せしめたまひけり。（ヒラキ・オコシタマフナリ）
金剛心なりければ
ひとしと宗師はのたまへり。
金剛の信心ばかりにて
自然の淨土にいたるなれ。
さだまるときをまちえてぞ
ながく生死をへだてける。
一心かけぬとおしへたり
三信具せずとおもふべし。
願に相應するゆへに

教と佛語にしたがへば
一九眞宗念佛きゝえつゝ
希有最勝人とほめ
二〇本願相應せざるゆへ
信心亂失するをこそ（ミダレ・ウシナフコトヲナリ）
二一信は願より生ずれば
自然はすなはち報土なり
二二五濁增のときいたり
道俗ともにあひきらひ
二三本願毀滅のともがらは
大地微塵劫をへて
二四西路を指授せしかども（オシヘサツケシニ）
曠劫已來もいたづらに
二五弘誓のちからをかふらずば

外の雜緣さらになし。
一念無疑なるをこそ
正念をうとはさだめたれ。
雜緣きたりみだるなり
正念うすとはのべたまへ。
念佛成佛自然なり
證大涅槃うたがはず。
疑謗のともがらおほくして（ミタノチカヒヲ、ウタカフルノ、ソシルモノナリ）
修するをみてはあだをなす。
生盲闡提となづけたり（ユマレテヨリノシホタルモノ、センタイハホトケニナリカタシ）
ながく三塗にしづむなり。
自障障他せしほどに（ワカミヲサヘ、ヒトヲサエタルナリ）
むなしくこそはすぎにけれ。
いづれのときにか娑婆をいでん

佛恩ふかくおもひつゝ　つねに彌陀を念ずべし。
二六娑婆永劫の苦をすてゝ　淨土無爲を期すること
本師釋迦のちからなり　長時に慈恩を報ずべし。

第六章　源信和尚

第一節　厭欣の思想

厭離穢土と欣求淨土

日本に於いて、西方淨土を欣求した人々は數多くあるけれども、法然聖人以前にあつて最も著名なのは源信和尚である。そして、その主著『往生要集』は厭離穢土欣求淨土の思想を根柢として、强く本願念佛の一法のみが、濁世末代の教行たる旨を明かにせられた。同書の冒頭に云く

「夫往生極樂之教行濁世末代之目足也、道俗貴賤何不歸者、但顯密教法其文非一、事理業因其行惟多、利智精進之人未爲難、如予頑魯之者豈敢矣、是故依念佛一門聊集經論要文、披之修之易覺易行。」

厭欣思想の眞實義

卽ち、彼は深く時機を內省し、濁世末代の相と頑魯なる人間性の內面に沈潛して、痛切に念佛の一門を喜んだのである。されば、『往生要集』は十門から成る中、最初が厭離穢土、第二が欣求淨土に始つて、第四正修念佛門以下に於いて廣く念佛の法門を叙し、その間に「往生之業念佛爲本」といふ語を置いて、我等の歸すべき所を明示されてゐる。

十界圖（地獄）

然るに、厭欣の思想なるものはともすれば單純な厭世思想の如く誤解せられ、特に地獄と極樂の對比から、浮薄な道德的喩說の如く考へられ易い。そして現實人生に對しては、極めて消極的な教說の如く思はれてゐる。併し、果して

さうであらうか。眞實に人生の虛假なる姿を眺め、その虛假を超えて眞實に觸れむとするものは、如何にしても厭離穢土の一面と欣求淨土の反面とを、その自證の世界に於ける二面として顧みずにゐられないはずである。實に厭離穢土は現實の痛切な自覺であり、欣求淨土はその現實の自覺より必然的に起る理念である。しかも、厭離と欣求とは二つの別々な信念ではなくて、眞實なる自己心證の表裏なのである。即ち、厭離を外にして欣求なく、欣求を離れて厭離はないのであつて、眞實を求めて現實人生に最も積極的に働きかけるものは、この二面の思念に裏付けられずにはゐないのである。

念佛爲本

かくて、源信和尙の念佛爲本の教へは實に厭欣の如實なる姿の上に發見せられた白道であつて、こゝに人生に於ける念佛の意味が始めて明かにせられたのである。宗祖が『歎異抄』(三七右)に「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのことみなもてそらことたはことまことあることなきに、ただ念佛のみぞまことにおはします」と云はれたのも、この間の消息を明かにせるものと云ふべきである。

第二節　報土と化土

報化二土

『大經』の項に於いて述べた如く、彌陀の淨土には報土と化土との別があり、明かに佛智を信ずる弘願の行者は報土に往生(化生)し、不了佛智の要門の行者は化土に往生(胎生)するのであつた。それ故に、龍樹は『易行品』(九左)に「若人種二善根一疑則華不レ開、信心淸淨者華開則見レ佛」といつて信疑の得失を明かにし、又天親・曇鸞も「如來淨華衆正覺華化生」の句に於いて、この意味を含めたのである。然るに、この三師は報土の因果を明かにするに急しくて未だ化土の因果に及ばず、道綽以後も亦因の研究にのみ努力が拂はれて、果の方面は依然として明かでなかつた。然るに、源信は明かに懈慢界なる化土を別立して、正しく報化の二土を辨立したのである。

報化二土辨立の根據

『往生要集』第十問答料簡門の第三「往生多少」の中に、彼は『菩薩處胎經』に依つて淨土に生れ難き所以を問ひ、懷感禪師の『群疑論』を以つてそれに答

へ、こゝに報化二土の判を示してゐられる。即ち、『菩薩處胎經』に「こゝを去る西方十二億那由他に懈慢界があり、西方の願生者は多くこの懈慢界に執着する爲、億千萬人の中漸く一人淨土へ往生する」とある文を引用し、この文より考ふれば彌陀佛國は甚だ生じ難いのではないかと問ひ、その答に『群疑論』を引き、更に『處胎經』の後の文に依つて「雜修のものは懈怠慢惰で執心が牢固でないから懈慢界に止り、專修の人は執心牢固であるから彌陀の淨土まで進むのである。されば、報の淨土に往生するものは少いけれども、化の淨土に往生するものは多い」と答へてゐる。されば、源信の意に依れば、『處胎經』は報土に約して、往生の難を說いたもので、化土に就いて云へば、往生するものは多いのである。かくて、專修のものは執心牢固なるが故に報土に往生し、雜修のものは執心不牢固なるが故に化土に往生すると說いて、そこに報化二土を明示せられたのである。

報化二土の意味

思ふに、報土とは眞實報土とも云ひ、阿彌陀佛の本願と修行とに依つて眞實に報ひあらはれた淨土のことであり、化土とは方便化土とも云つて、自力の諸行往生者や自力念佛者の爲に假りに設けられた淨土である。されば、如來の願意を顧みる時、往生の因に眞假の區別があるのであるから、所生の報土にも報化(眞假)の別を詳かにせねばならないはずである。こゝに源信の著しい功績があるのであつて、宗祖の眞假分判はこの源信の報化二土の決判に負ふ所が多いのである。

(正信念佛偈)

源信廣開一代教
偏歸安養勸一切
專雜執心判淺深
報化二土正辨立
極重惡人唯稱佛
我亦在彼攝取中
煩惱障眼雖不見

(念佛正信偈)

源信廣開一代教
偏歸安養勸一切
依諸經論撰教行
誠是爲濁世目足
決判得失於專雜
廻入念佛眞實門
唯定淺深於執心

大悲無倦常照我
報化二土正辨立

一源信和尚ののたまはく
　化縁すでにつきぬれば
　われこれ故佛とあらはれて（エトノホトケト・マフスコトナリ）
　本土にかへるとしめしけり。
二本師源信ねんごろに
　念佛一門ひらきてぞ
　一代佛教のそのなかに
　濁世末代おしへける。
三靈山聽衆とおはしける
　報化二土をおしへてぞ
　源信僧都のおしへには
　專雜の得失さだめたる。
四本師源信和尚は
　處胎經をひらきてぞ
　懷感禪師の釋により
　懈慢界をばあらはせる。
五專修のひとをほむるには
　雜修のひとをきらふには
　千無一失とおしへたり（センニヒトツノトカ、ナシトナリ）
　萬不一生とのべたまふ。（マンニヒトリモ、ホウトニムマレストナリ）
六報の淨土の往生は
　化土にむまるゝ衆生をば
　おほからずとぞあらはせる
　すくなからずとおしへたり。

七男女貴賤ことゝく
　行住座臥もえらばれず（アルタ・ト・マル、カル、フスナリ）
八煩惱にまなこさへられて
　大悲ものうきことなくて
九彌陀の報土をねがふひと
　本願名號信受して
一〇極惡深重の衆生は
　ひとへに彌陀を稱してぞ
　彌陀の名號稱するに（トナフルナリ）
　時處諸緣もさはりなし。（トキ、トコロ、ヨロツノコトナリ）
　攝取の光明みざれども
　つねにわが身をてらすなり。
　外儀のすがたはことなりと
　寤寐にわするゝことなかれ。（チテモヤメテモ、トイフナリ）
　他の方便さらになし
　淨土にむまるとのべたまふ。

第七章　源　空　聖　人

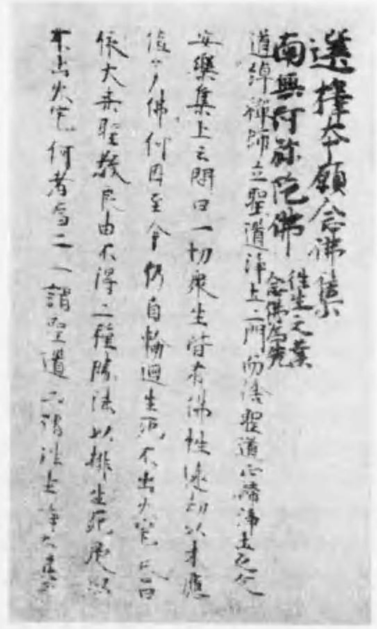
第一節　選　擇　本　願

淨土宗の獨立

元祖一代の功績は、特に道綽に依つて淨土宗を開き、善導に依つて念佛往生の大道を示し、以つて、淨土宗獨立の旗幟を明かにせられた點にある。さ

選擇集の要點

れば、浄土宗立教開宗の根本聖典たる『選擇本願念佛集』には、よく浄土教義の要點を整理して、選擇本願の他力念佛を高調せられた。『選擇集』は章を十六に分つけれども、その中、特に注意すべきは第一教相章、第二二行章、第三本願章、第八三心章、第九四修章の五章である。



選擇集（盧山寺本）

即ち、教相章に於いては、道綽禪師の『安樂集』に依つて聖浄の二門を分別し、聖道門を捨てゝ浄土門に歸せよと勸め、二行章に於いては、善導の『散善義』に依つて浄土門の行體を示し、雜行を捨てて正行（念佛）に歸せよとすゝめ、次の本願章に入つて正しく彌陀の願意を考へ、以つて念佛往生の大道を示し、更に三心章に到つて、その念佛には必ず三心を具すべき旨を明かにし、四修章に於いて心具の念佛を勸め、又、前後の諸章に廣く念佛の利益を說き、最後には十六章を結んで「夫速欲離生死二種勝法中且閣聖道門選入浄土門欲入浄土門正雜二行中且拋諸雜行選應歸正行欲修於正行正助二業中猶傍於助業選應專正定正定之業者卽是稱佛名稱名必得生依佛本願故」（『選擇集』末四行）と仰せられてゐる。まことに、本書はその題名に示すが如く、選擇本願の念佛（專修念佛）を勸め給ふより外はなかつた。

本願の念佛

然らば、その本願の念佛といふは如何なる念佛なのであらうか。先づ、卷首を見るに「南無阿彌陀佛」と佛の尊號を出し、その下に「往生之業念佛爲本」と注せられてゐる。この注語は源信の『往生要集』に出づる文で、數多き諸行の中、本願の念佛を以つて往生の正定業とする意味である。かくて、第二の二行章に於いて、「問曰何故五種之中獨以稱名念佛爲正定之業答曰順彼佛願故意云稱名念佛是彼佛本願行也故修之者乘彼佛願必得往生也其本願義至下可知」と問答し、次の本願章に到つて、その義を明かにせられた。今、その大要を云へば、冒頭に「彌陀如來不以餘行爲往生本願唯以念佛爲往生本願之文」と標して、『大經』第十八願の文及び善導の本願加減の文を引き、次に如來の

本願を選擇本願と名づくるは、選擇は取捨の義であつて、不清淨の行を捨てて清淨の行を取るといふ意味なることを述べ、然る後、特に第十八願に於いて一切の諸行を選び捨て念佛の一行を取つて、往生の本願となし給うた願意を闡明せられてゐる。こゝに、元祖は勝劣難易の二義を擧げて、念佛を往生の本願とする理由を説明せられた。即ち、勝劣の義とは、念佛は萬德の歸する所で宛かも家の如く、諸行は僅かに家の一部たる棟梁等の如く、從つて凡ての功德を攝する念佛の勝を選取し、劣つた諸行を捨てゝ本願となし給うたといふのである。次に、難易の義とは念佛は如何に愚痴無智のものも修し易く、諸行は容易に修し難いから、念佛を往生の本願となし給うたと云ふので、要するに、諸行は普遍性と眞實性とを缺き、念佛は最も普遍的にしてしかも至上價値を有する行であるから、これを往生の本願としたといふのである。かくて、念佛こそは如來に依つて選擇せられた唯一無上の行であつて、選擇本願の行と云はれる所以もこゝに存するのである。

勝易の二德

併し、こゝに注意すべきは、元祖が稱名念佛を選擇せられた願意をたづねるに、一面には所稱の名號そのものに就いて勝の德を立て、しかも他面稱名から易の德を示されたといふことである。思ふに、これ恐らくは元祖の眞意を窺ふべき要點であつて、名號そのものに就いて勝の德を立てられたことは、稱名の本義が單なる口稱にあるのではなく、所稱の名號、それは佛の無限大悲を表象する所の佛の御名を聞信し、これに生かされる所に稱名の生命があることをあらはされたものであり、更に稱名に就いて易の德を設けられたのは、定散の諸行に對してたもち易く、稱へ易い易行であるといふ許りでなく、如來の本願は上は一形を盡し下は十聲一聲に至るまで、稱へんものを迎へとらんとの易行の至極なる旨をあらはし、依つて以つて佛の願意は十聲一聲を待たず、佛の御名を聞信する一念に救はるべきものなることを知らせんとし給うたのである。かくて、次に念聲是一と乃下合釋の義を問答せられたのも、結局この深意を顯したものと窺はれるのである。

勝易の二面

第二節　廢助傍の三義

念佛と諸行

先に述べた如く、元祖の念佛はたゞ口に稱へる稱名念佛ではなく、本願名號の謂れを聞信し、これに生かされた喜びの念佛であつた。然るに、近く『大經』の三輩段を見ると、そこには、念佛の外に捨家棄欲、起立塔像、發菩提心等の諸行が說かれてゐて、往生の行は必ずしも念佛に限らざるものゝ如く見える。そこで、元祖は次の三輩章に於いて、所謂廢助傍の三義を立てゝ、三輩段を以つて念佛往生を說くものとし、念佛と諸行とは永く別なる旨を詳かにせられたのである。

廢立

まづ、廢立とは善導の『觀經疏』(『散善義』)に「上來雖說定散兩門之益望佛本願意在衆生一向專稱彌陀佛名」と云うた釋意に基くもので、たとひ菩提心等の諸行が說かれてあつても、それは非本願の行であるから廢の爲のものであり、殊に、經文には明かに「一向專念無量壽佛」と說かれてゐるから、とこしなへに立つべきものは本願の念佛であつて、この一段を念佛往生之文と稱するには何の差支へもないといふのである。次に、助正といふのは助は助成の意味で、これに同類助成と異類助成とがある。即ち、同類助成とは五正行の中、前三後一の助業を以つて稱名正定業を助成するのであり、更に異類助成とは捨家棄欲等の諸行を以つて、念佛の勤修を怠らぬやう助成するのである。從つて、この場合にも三輩念佛往生の文と稱してもよいといふのである。更に、傍正の意とは念佛も諸行も共に往生の行となると說くもので、この念佛諸行各々に三品の差別ありとするのである。例へば、念佛に就いて云へば、念佛の多少、時節の長短、安心の淺深に就いて差別を生じ、諸行にあつては、所修の行に勝劣があるから、能修の方にあつても自ら三品の差別を生ずるといふのである。併し、この場合に於いても念佛諸行の二門を說きつゝ、念佛を正とし諸行を傍とするのであるから、三輩念佛往生之文と稱し得るのである。

助正

傍正

元祖の本意

然らば、此等の三義の中、何れを元祖の本意とするかといふに、この三義を結んでかく示されてゐる。云く。

「此三義雖有不同共是所以爲一向念佛也、初義卽是爲廢立而說、謂諸行爲廢而說念佛爲立而說、次義卽是爲助正而說、謂爲助念佛之正業而說諸行之助業、後義卽是爲傍正而說、謂雖說念佛諸行二門以念佛而爲正以諸行而爲傍、故云三輩通皆念佛也、但此等三義殿最難知、請諸學者取捨在心、今若依善導以初爲正耳」（『同』本二十四左）

この文は與へて奪ふ筆格で「殿最難知云々」と云はれてゐる所では、何れの義を取つてもよいやうであるが、次に「今若依善導以初爲正耳」と結ばれてゐる點から見れば、第一の廢立義を正とすることを知り得べく、偏依善導一師の元祖として、それはもとより當然のことである。又、如來の本願を顧るに、如來は明かに諸行を捨てゝ念佛往生の願を建て給うたのであるから、廢立位の念佛こそ純一無雜なる本願の念佛であつて、助正位の如く餘行を以つてこれを助けるものや、又、諸行と對等に見る傍正位の念佛は、定散自力の念佛といはなければならない。かくて、往因に於いて種々の別がある以上、所入の位に於いても報化二土の別があるべく、元祖も折々源信の報化二土の判を用ひられたのである。併し、概してその化風を見るに、諸行の往生に就いては、善導の「百時希得一二」（『往生禮讃』五右）とか「千中無一」（『同』五左）とか云ふ語に依つて、婉曲に諸行の報土往生を拒み、又、念佛に就いて自力他力を說くこと少く、たゞひとへに念佛の大道に心を寄せしめんと努められたものゝ如く、その點猶時機の純熟せざるものが見られるのである。

三心具足の必然性

第三節　必具三心の意義

既に注意した如く、元祖の念佛はたゞ口に稱へる稱名念佛ではなく、本願名號の謂れを聞信し、これに生かされた信具の念佛であつた。從つて、元祖としては念佛爲本を强調すると共に、三心の具足を注意せねばならなかつたのであつて、『選擇集』の三心章には、冒頭に「念佛行者必可具三心之文」と標し、『觀經』の「發三種心」の文とこれに對する善導の釋文、卽ち『疏』の廣釋（就行立信文のみは二行章に引くから略する）と『禮讃』の略釋とを引き、次に私釋を加へられてゐる。

三心釋の三要點

善導の三心釋に就いては、既にその一斑を述べたからこゝには省略するが、元祖はその私釋に於いて、大體次の三點を注意せられたのである。即ち、その一は三心を「行者の至要」とするので、如何に念佛の行者となつても、三心が具足しないならば報土往生は出來ないと決せられてゐる。念佛を往生の正業とするのも、それは三心の信が規定するのであつて、これ曇鸞が如實修行相應を以つて信心とした旨を相承するものである。その二は至誠心を內外相應の眞實心とするので、この釋の意は、元祖の『三部經大意』『和語灯錄』一（六右）に「其の解行と云ふは、罪惡生死の凡夫、彌陀の本願に依つて、十聲一聲決定して生ると、眞實にさとりて行ずるこれなり。外には本願を信ずる相を現じ、內には疑心を懷く、是は不眞實の心也」とある文に依つて、その意趣を知るべきである。その三は、三心を深心に收め、深心の有無に依つて苦樂昇沈の別が生ずる旨を明かにしたことで、「深心者謂深信之心、當知、生死之家以疑爲所止、涅槃之城以信爲能入」といふのは有名な釋である。これに依れば、我々が生死に輪轉するのは不了佛智の疑を持つからであり、涅槃常樂の道に進むのは、明信佛智の信に住するからである。それ故に、善導は深心に就いて、機の深信と法の深信とを開き、以つて機の善惡を簡ばず、九品の機凡て此の深心ひとつに依つて往益を得ると決定したのであつて、こゝに宗祖の信心爲本の傳統があるのである。

念佛爲本と信心爲本

思ふに、元祖は念佛爲本と說き、その元祖の敎へを純一に傳承せられた宗祖は、又信心爲本と敎へられた。忽ち見れば、兩祖その意を異にするが如くであるけれども、決して念佛爲本は信心爲本に對すべきものでなくして、能くその意を成ずるものなのである。即ち、聖道の行と淨土の行と相對するが故に、元祖は念佛爲本の化をなし給うたのであるけれども、その念佛はただ口を動せば足るといふのではなく、又、能稱の功を募るものでもなく、本願名號の謂れを深信して、喜び喜び稱へる念佛であるから、これを內面的に云へば、却つて信心を本とするのであつて、これ宗祖が信心爲本を以つて念佛爲本を成ぜんとせられた所以である。かくて、元祖の御消息『和語灯錄』四、（五左）にも「何かに罪深く、愚につたなき身なりとも、其れには依り候まじ。只佛

の願力を信じ、信ぜざるにぞ依り候べき」と仰せられたので、かうした意味は和漢の語灯錄に、屢見られるのである。

往生の決定

顧るに、如來の本願に三信と十念とを誓ひ給ふのは、三信を以つて十念の律法化を防ぎ、十念を以つて三信の概念化を防いだもので、龍樹以來信行の何れにも偏せず、宗教生活の具體相をあらはされて來たのである。併し、往生の業事は何時成辨するかと云へば、それは稱を待たず、聞信の一念に決するのであつて、既に曇鸞は如實信行相應を信心に定め、今、元祖は行具の三心を注意して、信疑の決判を試みられたのである。淨土異流の中、この業成の義意を忘れて行を執じたものは長西・鎮西であり、よく業成の義に入つたのは、幸西・西山・隆寛等であつた。併し、未だ善を盡したとは云ひ得ても、美を盡したとは云ひ得ないのであつて、七祖を正しく傳統し、元祖の意をありのままに相承せられたのはまことに宗祖獨りであつて、宗祖に依つて淨土教はこゝに完成したのである。

（正信念佛偈）

本師源空明二佛教一
憐二愍善惡凡夫人一
眞宗教證興二片州一
選擇本願弘二惡世一
還二來生死輪轉家一
決以二疑情一爲二所止一
速入二寂靜無爲樂一
必以二信心一爲二能入一

（念佛正信偈）

源空曉二了諸聖典一
憐二愍善惡凡夫人一
眞宗教證興二片州一
選擇本願施二濁世一
還二來生死輪轉家一
決以二疑情一爲二所止一
速入二寂靜無爲樂一
必以二信心一爲二能入一

一本師源空世にいでゝ
　日本一州ことぶく
二智慧光のちからより
　淨土眞宗をひらきつゝ

弘願の一乘ひろめつゝ
　淨土の機緣あらはれぬ。
本師源空あらはれて
　選擇本願のべたまふ。

三善導源信すゝむとも
　片州濁世のともがらは
四曠劫多生のあひだにも
　本師源空いまさずば
五源空三五のよはひにて
　厭離の素懷をあらはして
六源空智行の至德には
　みなもろともに歸せしめて
七源空存在せしときに
　禪定博陸まのあたり
八本師源空の本地をば
　綽和尚と稱せしめ
九源空勢至と示現し
　上皇群臣尊敬し

（コウワウナリ、クヰシム・タカヤウナリ）

本師源空ひろめずば
　いかでか眞宗をきとらまじ。
出離の强緣しらざりき
　このたびむなしくすぎなまし。
無常のことはりさとりつゝ
　菩提のみちにぞいらしめし。
聖道諸宗の師主も
　一心金剛の戒師とす。
金色の光明はなたしむ
　拜見せしめたまひけり。
世俗のひと〳〵あひつたへ
　あるひは善導としめしけり。
あるひは彌陀と顯現す
　京夷庶民欽仰す。

（シヤウニンノ、オンシナリ）（ショシエノ、オ、シノ、シヤウニンノ、オンデシニ、ミナナリタマフ）（ミヤコ・ホナカ、コロジノタミ、ウヤマヒ、アフキタテマツル）

一〇承久の太上法皇は
　釋門儒林みなともに
一一諸佛方便ときいたり
　無上の信心おしへてそ
一二眞の知識にあふことは
　流轉輪廻のきはなきは
一三源空光明はなたしめ
　賢哲愚夫もえらばれず
一四命終その期ちかづきて
　往生みたびになりぬるに
一五源空みづからのたまはく
　聲聞僧にまじはりて
一六粟散片州に誕生して
　衆生化度のためにとて

（コノニチホンコクナリ）（ウマレタマフトナリ）

本師源空を歸敬しき
　ひとしく眞宗に悟入せり。
源空ひじりとしめしつゝ
　涅槃のかどをばひらきける。
かたきがなかにをかたし
　疑情のさはりにしくぞなき。
門徒につねにみせしめき
　豪貴鄙賤もへだてなし。
本師源空のたまはく
　このたびことにとげやすし。
靈山會上にありしとき
　頭陀を行じて化度せしむ。
念佛宗をひろめしむ
　この土にたび〳〵きたらしむ。

（ウタガフコ・ロナリ）（サトリイルナリ）（ヨキヒト、イヤシキモノ）（カシコク、スクレタル・オロカナルモノ）

一七阿彌陀如來化してこそ
　化緣すでにつきぬれば
一八本師源空のおはりには
　音樂哀婉雅亮にて（アハレミ、スメル、コロナリ）
一九道俗男女預參し（カヲテアツマル）
　頭北面西右脇にて（カウベヲキタニシ、オモテヲニシニス）
二〇本師源空命終時
　初春下旬第五日
本師源空としめしけれ
　淨土にかへりたまひにき。
光明紫雲のごとくなり（ムラサキノクモノゴトシ）
　異香みぎりに映芳す。（カゞヤキカウバシ）
卿上雲客群集す
　如來涅槃の儀をまもる。
建暦第二壬申歳
　淨土に還歸せしめけり。

眞宗教義概說　終

昭和十四年五月二十日印刷
昭和十四年五月二十五日發行

定價金壹圓五拾錢

著作者　大谷大學
不許複製
右代表者　青山捆網
印刷兼發行者　京都市正面通烏丸東入　西村七兵衛
發行所　東京市神田區神保町（振替東京二五四一番）
京都市正面烏丸東入（振替大阪一七〇四番）　法藏館

大谷大學藏版

392
482

終